しき壯丁を失つた爲めに、跡に殘つたのは年少者と老人のみであつたので急に男子が貴重となつた、あまりに男がもてた結果甘やかされて弱々しく育つた、耐久力が全然缺けて、往年薩摩隼人の面影は何處にも見られない、現在の松方大山山本等の各先輩が死亡した時を一段落として薩長土肥と云つた其の薩州丈けが削除されるであらうと云ふ、悼むべく悲しむ可き事實である。

中國と東北九州の學生は、一般的に其の性格が相違して居る、假令東北乃至九州の人々は、心に十のものを持つに、發表する場合は、漸く六ッか七ッしか發表し得ぬが中國筋の開けた土地では、八ッのものを十位に云ふ、三好氏は人に謙讓の美德が必要であると同時に、引つ込み思案なるものを一掃したいと云ふ、是れ亦、尤もな考へだ。

運動會は前年以來中止された、此れ又た相當の理由あり、由來此の種の會には必らず弊害が伴ふ、觀覽隨意とあつて、美しく飾つた女なぞが見物に來ると、自然美しい靴下でも穿き度くなるのが人情、要するにお前達の會ぢやから、お前達の措置が惡けりや、此方で警視總監同樣の地位を利用してピタリと止めてしまふのだ、運動會中止由來も其の理由に基く、運動會中止と云ふは當らぬ、運動會謹慎中と云ふが適當である。『敎育は凧の糸の樣なものだ、時にはのべたり縮めたり加減をやらねばならぬ』これも三好氏の話だ。

明善寮は二高の寄宿舍で絶對的の自治寮である、此の生活は後に說く、三好先生物外と號す、物外先生此の頃新工夫の運動あり、藤八拳である、仙臺では學生間に藤八が盛に流行する、三好氏は此れを改良して三好式改良體操と命けたさうな、座つてエッとかヤッとか云ふのに多少の制肘を加へたものゝ由、三好氏の餘光は、今日と云へども、チラ〳〵と姿を見せる。

五、明善寮の生活振

明善寮は市内清水小路一番地に在り、文字の黑く浮き出た看板を見て、門内に入ると栗の木が青い蔭を庭に落して居る、突き當りが玄關で下駄箱が夥しく並んで居る

左側に霽風堂がある、玄關を入つて直ぐ右は賄部屋で左の取り付きの室が食堂である總二階、家は南に面して凹字形に建てられて居る、中庭が庭球コート、中庭から眞向ふに見える山が愛宕山俗に向ふ山と云ふ、學生の散歩場である。

室數總計五十一、一室は六疊で其れに十六燭の電燈がぶら下り、一室の定員二名、都合百名を入るゝに足る、一高の如く自修室と寢室と分けてない、一間半間口の室に對し二枚の障子を嵌めてあるので頗る見苦しい、非美術的な盲の學校の爲めに建造した樣な頑丈な障子をあけて室内に入ると、本箱と机がある丈けである、こゝには萬年床もストオムも無し、頗る文明式にノックをして、這入らねば不可い。

一年千二百圓の家賃を拂つて居るのであるが、家の建造から言へば、下宿屋に少しく毛の生えた物と云ひ度い、庶務會計炊事、各寮生から役員を撰んで事務を署理して居る一高の如く別に寮務係と云ふが設けて無く生徒自身で何事もやつてのけるのである、寮風會と云ふがあり、各委員が集まつて不都合者が出た場合の事を處決する。『第十條　役員會ハ制裁權ヲ有ス、但シ制裁ヲ分チテ忠告及退寮ノ二トス』此の寮則が口を利いて何事も圓滿に解決。

目下の役員は庶務幹事、炊事幹事、會計幹事、庶務委員、會計委員等である、此れ等の委員は任期を一年とし、一年毎に改撰、三回以上重任し得る、三學年の三學期かゝは役員に撰ぶ事が出來ぬ、總會は毎學期の終りに開かれるのである。

入寮の希望者が多くて毎も定員に滿ちて、折角申し込んで來るのを見す〳〵斷らねばならぬ事もあるさうな、明善寮は別に第一分寮を田町二番地に置き、第二分寮を南六軒町二番地に置く、第二分寮は遠藤庸治氏の所有である。眺望のよい住み心地のよい家である、丁度工學專門部の裏門の近くである。

三ツを併せて猶百五六十しか入れない、明善寮は益す〳〵成績がよい事を認めて、近々大建築をやつて理想的の寄宿寮をつくるやに聞く。

明善寮はどこまでも自治寮で、門なぞ始終あけたきりである、別に門限時間がない

消燈時間は定まつて居るが門限が無い爲め、朝食堂で顔を合せれば別に文句はない、此の故を以て惡い人達も出來る、蓋し止むを得ないであらう。

賄料六圓參拾錢（麥飯）寮費まで併せて七圓五十錢となる、寮費は電燈料その他に費消される、但し、物價は時々に變化する。今日は大分違ふ、次に五日間の献立を記す、時は六月。

朝

金　菜の汁
土　豆腐汁、豆
日　芋汁
月　大根汁
火　エンドウ汁

晝

ハム、大根
豚焼肉
オムレツ
刺身
カツレツ

晩

卵二ツ、菜浸し
茶碗蒸し
魚と菜の煮つけ
ブタ飯
魚、豆腐

別に漬物がつく、何すればぞ肉類の多きや、肉は青年の好むところである、同時に經濟的から割り出したと云ふ事も一つの理由である、仙臺の相場は豚肉十三錢、牛肉二十二錢である、肉類の多いのは此のソロバンである、一日の副食物代の見積り七錢五厘の由七錢五厘を超過する事は許されぬ、一食二錢五厘づゝのおかづ代、一日つまり十五錢が食料として計上されるところ、飯は一ツづゝ飯櫃を當てがはれる譯でなく四人位のところに一つの飯櫃を置いて、それを平げ終つたならば別な飯櫃のお代りをとる事となつて居る。（但し目下は物價五割の騰貴也）

明善寮の入り口に、綱領なるものがある。追て扁額に仕立てゝ何處かに掲げるさうな、其の文に曰く

綱領

第一、寮生ハ高潔健全ナル氣風ヲ養成シ以テ本校生徒ノ中幹タルヲ期スベシ
第二、寮生ハ相互信愛ヲ旨トシ以テ自治協同ノ精神ヲ發揮スベシ
第三、寮生ハ規律ヲ重ンジ以テ品性ノ修養ニ資スベシ

霽風堂は玄關に向つて左側にある、疊五十二疊をしき、正面に前々校長中川槐陰先生の筆なる『霽風堂』の額をかけ、三好中川兩氏の寫眞をかけてある、明善寮の講堂と云ふべきも、かつは柔道擊劍の道場たり、敷かれた疊は其れに適する樣つくられて

居る霽風堂は又た明善寮唯一の社交倶樂部である。

六、二高の年中行事

第二高等學校は二十五年九月を以て寄宿舍を開始したが、二十七年十月廢止された三十一年十月更に開始せられて三十五年九月又もや廢止された、此の時の廢止は事實上、校舍の狹隘から、寄宿舍の建物を引き上げたものと思ふ、三十九年九月明善寮設置、是れが寮の歴史、故を以て毎年九月を以て寮の紀念祭をやる。

但し、此の紀念祭は、一高の紀念祭と似て多少の相違がある、一高は其の夜全寮茶話會と云ふを催して互に火花を散らすが、此處のは食へや〳〵の紀念祭である、其の日は會場たる霽風堂をキレイに掃除して色々飾りつけ、各室意匠を凝らして飾り物をする、此の點は頗る一高式、校長教授を招待して第一部の式が終れば其の日は無禮講。

九月頃は散歩するに持つて來いの時である、此の時二高の學生は向ふ山邊に姿を現して盛に寮歌をうなる、爪先が冷たくなる頃ボッ〳〵兎狩の話がはじまる。『兎狩りをやらうかなあ』『よからう』網番は網番、勢子は勢子と役割が定まると、賄方まで引率して二三里山奥に出かけて行く。

蔔子の蔓に帽子を叩き落され、頭から蜘蛛の巣を冠つて百姓家の庭に集まると、賄方はセッセと皮を剝いて料理して居る、兎飯に腹をつくつて月を見ながら歸りつくと午後十時。

『愉快だつたなア』

雪がチラ〳〵と見へ出すと雪合戰がはじまる、白い冷たい雪を掴んでポン〳〵と投げる。

『オウ痛い』

『君の方の足袋穿かぬ同盟はどうしたい』

『あれかい、駄目さ、長續きするもんか、主謀者が第一番に兵古垂れたんだもの。』

『さうだらう、君の足袋は奇特に破れてないなア。』

『破れて居ないと見えるかイ、拇指の穴はチヤンと下の足に墨を塗つたのさ。』

『さうだらうと思つた。』

寒稽古に通ふ人も多い、殘月寒く天にかゝる頃、ガタ〳〵慄えて稽古着小脇に抱へて學校に通ふを、早起きの人々は見つける事がある。

石を投げても池の氷が割れぬ、となると持上るのはスケート熱、向ふ山と大年寺山の間に小さい池がある冬になると明善寮の生徒は、總出でこゝへ行く、少しハイカツタ向きは、滝車で伊豆沼に行つて、曲滑りなどをやるもあり。

寮生には、外套や靴を所有しない向きが多い、仕方なく小倉服に下駄をつゝかけて歩く、外套なしに襯衣を二三枚重ね着して、いい、いい、いい、膨れて兩手を洋袴のかくしに突き込んで羽毛をむしつた鷄の肌の様な顔の皮膚を、毛穴立ゝして歩いてる學生をよく見かけるは冬の日の仙臺である。

冬が去つて春が來る、櫻の花が片平町の校庭に亂れ咲く、其の頃は寮生の心にも春の芽が吹く、片平町の監獄署のグラウンドにコンコンと球を彈くバットの音が冴えるボールシイズンが來るのは、もう眼の前だ、明善寮の庭球コートにもクロヴアーが一と雨毎に柔かく延びる、綠りの三ッ葉の間に白い花が咲く。

或る時、東京大相撲が仙臺に來た事があつた、其の時分十三の浦の友人——小學時代の同窓生である某が明善寮に起居して居て、十三來ると聞くや否引つ張つて來て土俵を拵へ十三の浦を指南役として相撲をはじめた、十三のコーチ宜く効を奏せりや否運動部には相撲部も加はつた。

仙臺は歌留多の盛な土地である、學生の間には特に流行して居る。

『村雨の露も未だ干ぬ……ありました、あゝ痛い。』

『勘忍してくないね(呉れ玉へ)』

『みかのはら』

『ほらほらッ』

『有りした、いづみきとてか戀しかるらん、と云ふのでがすべ』

『瀬を速み岩にせかるゝ』

『有りました』

『違ひす、此方にありす』

歌留多會の流す害毒も數多し、其れも追々に說く。

七、素人下宿と害毒

學校のある土地の常として、市内には學生を目的の下宿、素人下宿の類が多い、前記の如く明善寮の如きは可なり理想的とは云へ定員百名に充つか充たぬ位、多數の學生に、清國留學生等を併する時は餘程大規模な寄宿舍でなければ、收容しきれぬ、其の家庭又は親族の家庭より通學する學生を差し引くとも、其の數は極めて小數であつて多數は下宿乃至素人下宿によるの他は無い。

普通の下宿もあるけれど、學生にして下宿屋に在るものは所謂『お登りさん』の一種であつて、多數の學生は、自ら市内を探檢し、快よき家、愛想よき主婦、眺望よき間どり等を撰んで得意で居る、又、學期の交り目等には多數のこれ等下宿――學生をおいて飯を食つて居る家々では『あき間あり』の札を貼つて網を張つて待ち構えて居る。

其の巢窟？　と云ふは、學校所在地たる片平町を中心とし、片平町、花壇、南六軒町、遠くて荒町のあたりへかけて此の邊一圓、多數の素人下宿が散在する、素人下宿と云ふ名稱は、當然他に職業があり其の傍ら人をおくと云ふ、まア字義通りに解釋すればさうなるが、此の地の素人下宿と云へば、事實は下宿人をおいて其れを以て生活して居るので、普通の下宿と何等撰ぶ處が無い、そして其の主と云へば良人をなくした人、後家さんに年頃の娘と云ふので、大抵符を合した樣に娘が一人づゝは居る、其の娘はつまり『おとり』なるもの、學生も又た好んでかゝる下宿を撰ぶ。

其の結果は多くの場合、下宿を引き拂ふと同時に、其の娘をも受け取つて行かねば

ならぬと云ふ珍現象を來させる場合が出來て來るのである。

下宿料と云へば、通り相場が三度の食事に間代、炭薪料を加へて大抵十圓内外である、加ふるに仙臺は物價が廉い、下宿人の三人もおけば親子二人位樂々と喰へると云ふ、其の膳部と云ふと朝は味噌汁、猪口、晝は煮肴に何か一と品、夜は吸ひ物に何かのお煮〆と云ふ位である。

素人下宿に於ける下宿人の生活も、十人十色決して一樣に言はれぬが、素人下宿通になる程の人物であれば、自分の部屋に茶簞笥一ッ長火鉢、床には一軸をかけて床の間の活け花は宿の娘の手並、机に本立て式の如く、洒落たのは柱かけの鏡に、楣間には水彩畫か油畫かをかけ、其の身はメレンスの座布團に胡座をかいて黄縞の褞袍を引きかけて居やうと云ふ學生としては聊かゼイタク、之れで思ひ出したが、金澤の高等學校を卒業して大學に來た人々には、妻帶者が多いとの話、抑何に基因するかと云へば、これ又た素人下宿のお蔭であると云ふ事だ。此の弊、けだし、各學校地に見るの弊害である、どうしても、暖か味のある家族的な寄宿舍の必要を言はねばならぬ。

八、尚志會と其商業

第二高等學校には、尚志會と云ふがある、各學校の校友會と云ふに同じ、會長は校長武藤虎太氏、副會長は教頭杉谷泰山氏、其の會則の第一條に

『本會ハ本校生徒ノ氣風ヲ修養シ學生ノ本分ヲ盡スノ目的ヲ以テ文武兩道ヲ研究スルモノトス』とある。

尚志會の内容を分ちて、辯論部、科學部、劍道部、柔道部、弓術部、野球部、庭球部、端艇部、雜誌部の九部とする、各部長は教授を以て宛てる、其の下に委員をおき生徒より選擧する。

尚志會の大會としては、毎年五月辯論部及び科學部の大會を開く事としてある、秋十月か十一月には端艇部の大會が開かれる、各部の大會に就ては確たる開期はない、隨時之れを行ふ學業と接觸しない程度に開會する、陸上運動會は昨年頃より中止、

弊害ありと認めて中止したので、今後委員等が熱心に眞に運動を主眼として實行するものなれば開會するとの話である、或は近く復活するかもしれぬ。

尙志會の內容は以上の如くであるが、辯論部は壁頭に置かれた丈け可なり振つて居る、辯論部の事業と經過を說いて見やう。

我部活動の方針として擧げたのを見ると。

一、可成多數の會員をして演壇に立たしむる樣に機會を作ること

二、出演者をして出來得る限り眞面目の準備をなさしむる事

三、出演者奬勵の爲めに年三回以上公開の辯論會(討論會、聯合演說會)を開くこと

四、辯論奬勵のために本部經費豫算の許す限りに於て、賞懸の辯論會を多くすること

以下略

辯論部は以上の如き理由抱負を以て事に當り、着實に事業をなし來つた、事の性質が元來眞面目な事業である、此の部員は校中の硬派分子を以て成る、活動の方針と云ふは、云はゝ豫算案で決算報告は別にある、辯論部の例會は、毎年六回開かれる、討論會は一學年に三回、此の中前二回を普通の討論會とし、後の一回を大討論會とする東北學生聯合演說會の如きも、辯論部の思ひ付きで東北六縣に亙る(市內丈けを除く)私立公立の各中學より選手をあつめた懸賞演說會で、非常な好成績である。

市內中學聯合討論會は、これも年一回開催する、四十三年十一月二十六日に催した討論會の議題は、在來の宗教は永遠に宇宙を支配すべきか』と云ふのであつた。其の時各學校選手思ひ〳〵に中學生にはマセ過ぎた口調を以て論じたが、中に東北學院普通部の某——不幸名を逸す——は滔々、羅馬史論を楯に論じ來り論じ去り、辯論部員を舌をまかせた、ゼスチユアから、音聲から、なみ居る聽集もアッと感に打たれ、滅多に人を賞めぬ粟野敎授も『これはうまい』と呟いたと云ふ事だ。

辯論部の會合で思ひ出すのが、二高獨特の狂言である、狂言は此の會のつきものでで裝束丈けは他から借りて來るが、演技は悉く部員の出演になる、大正三年に京都を出た。文學士高橋泰君など、在學中は黑人跳足の評を得て居た、四十四年二月十一日東

北學生聯合演說會の折にも『雙と座頭』の座頭の役を演じてヤンヤの評判をとつた。

其の日、高橋君は『イブセンと其の作物』と題してイブセンの評論を試みたが非常に脂ののつた演說であつた、高橋君は、今日もイブセン心醉の熱はさめぬ。

二高では毎年秋、野外演習――發火演習を試みる、行軍に行く地方は國見峠方面から、或年福島郡山方面に行つた、行く先々で演說をした、此の時高橋君やら一部二年の本間虎五郎君やらも同行した、本間は山形縣庄内の生れ、鶴岡中學の出身で同鄕人と大町一丁目邊に鶴蜂寮と云ふ私製の寮をつくつて居た。

郡山の安積中學で一行は校長の紹介で演壇に立つた、本間は其の時壇上から、目をパチ〳〵と圓くして演者に注目をした中學生を見下ろして『帝國殖民政策』なる素晴しい題目を演じた、但し、多數の中學生がそれを理會したか否かは疑問である。

九、科學部と運動部

科學部は塚本教授を部長とす、二部三部大合併で大いに論じ大いに書かんとする一部の生徒はこれに干與しない、實地的に科學の研究をしやうと云ふのであつて、何も花々しい事はやらぬ。

『斯く本部は神聖なる離俗的なる科學を實直に眞面目に考究するを以て目的とす、故に本部は花々しく活動し以て人目を驚かすが如き事なし、是れ反つて本部の特長なり、若し科學部は活動せずと云ふものあらば未だ科學部の特長を知らざる愚人なり』

科學部の委員はこんな事を言つて居る。

四十三年十一月には部長以下六波羅助教授、學生三十二名で小原溫泉に一泊し、翌日鑛物を採集し材木岩を見小阪峠を越へて、牛田銀山の製銀法を見て歸仙した、超えて本年二月十八日、仙臺瓦斯會社に實地見學し、其の前二月十一日、紀元節の夜は理科三年の教室に於てニウトン祭を催し、塚本教授の講演、田中教授の實驗、餘興などがあつた。

辯論部の華々しいに對し、科學部は光澤消しの默つてコツ〳〵と仕事をやつて行く

風がある。

以下、劍道、柔道、弓術、野球、庭球等は體育乃至運動部と總括して稱するも可であるべき部門であるが、各部を分けて其の現狀を說くとしやう。

劍道部長は瀧川敎授である、劍道も却々盛である屢々對校試合を試みて居る、其の記錄を試みに繰り廣げて見やう。

明治三十六年には(イ)白石深藏氏を棟梁とし水戸より一高に肉迫して負け、三十七年には(ロ)今井常平氏を元首として一高に挑戰して大に捷ち、三十八年には一高から來たが交涉整はず中止、四十年も中止、四十三年には(ハ)野村益雄を主將として一高に迫り此の時は負けた、つまり一回の負け越しである、遺恨十年一劍を磨く、二高の常に好敵とするは一高である。然し、大正七年には、見事一高を仕止めて一高の棟梁方針をかへさせる迄にしてしまつた。

劍道部では、一月十三日より三十二日間寒稽古を催すが、一部の(ニ)高野誠三は五百六十六本の猛烈を示し、小池敎授は百八本を以て大いに勇を示した、柔道部の神門敎授とよい對照である。

柔道部は粟野敎授部長たり、此の部には數名の有段者がある、此の部では敎授たる神門久太郎氏が非常の柔道熱心家で、六ヶ年の皆勤者である、但し其の手腕にいたつては未だ分らぬ輕々しく價値を極めてならぬ。

弓術部長は湯淺敎授、相當にやつて居る。

野球部長は古川敎授である、二高の野球部は相當に振つて居る、過去のスコアブックを繰つて見るに、四十三年五月二十五日以降、十月三十日までに都合六回のマッチに對し全勝の成績である、對手は高工と二回、市內聯合軍、二中、會津中學、醫專と各一回、右等の結果を見るに到底右の諸學校は二高野球部の敵でない事が解る。當分仙臺の野球界は二高の獨占であらう。二高野球部が之れを牛耳るであらう。

グラウンドは、今は片平町にある。

庭球部長は加納教授、此の部には十二名の選手がある、野球部長たる古川教授は、本職であるべき野球は出來ぬ代りに此の部に來てラケットを握つて援助して居る、學校のお雇教師英國人故ウォルター、デニング氏も在職中は時々腰掛持參で、

『やりましよう』

と流暢な日本語に愛嬌を振りまいて馳せ參ずるのであつた。

註　(イ)白石君は現在醫學士、朝鮮に開業中、(ロ)今井君は工學士、長崎電氣瓦斯技師長(ハ)野村君不詳(ニ)高野君不詳、

一〇、校友會雜誌から

雜誌部長は晩翠士井林吉氏、その白皙の面、美しき額、其の人よりはもとの如く、東海遊子吟の樣な雄大なる詩を聞かれない、でも、時々は脾肉の嘆にたへぬらしい、二三の長詩を發表した、獨逸語の教授として極めて無口に沈默してこつ〳〵と勉强をつゞけて居る。

と云へば、仙臺に來ての登張竹風氏は俄然其の性格に一變を來たした、以前の氏を知る人はニイチエイズムの塊肉であつたかの如き氏が、斯くも變化したかと云ふ事を驚くのであらう、四十四年十月頃講師として當校に來任次いで教授となつた、辯論部の會などに引き出されても一言辯じやうともせぬ、過去の火の如き登張竹風は事實上死して、仙臺に新に生を更へたる文學士登張信一郎として現出したものであるか。

近代文學の輸入は雜誌著作界の變動を來たしたは云ふまでもなく、從來學校の報告と生徒の下手な文章をお情けにのせたきりの校友會雜誌にまで影響し、小說と云ふものが載り、詩と云ひ歌と云ひ、一幕物の戲曲までが時として掲載さるゝ程の變調を來たした、予は一高校友會雜誌にこれを見たが、九十里距てた二高の尙志會雜誌にも又たこれを見たのである。

試みに其の一二をぬく。

尙志會雜誌第九十號を見る、卷頭に『宗教に就て』と題した論文、春の光、幼ない

印象の斷片と云つた樣な追懷めいたもの、幕あひと題した市村座の見物記、山と題した信州の谷あひの事を描寫したもの夢の男と云ふセンチメンタルなもの、ポンチの西鄕と云ふ小說、ゆかしの薄暮と云ふベルレヱヌの詩を譯したのがある、文藝ものが全百二十二頁の內、七十九頁まで塡めて居る。

雜誌より、ガーゼに泌みし血、と云ふ歌を抄出す。

塵塚の芥の中に棄てられんガーゼに泌みしわが紅き血は
うらぶれに泣き疲れたる男われ寧ろ死なむと口ぐせに言ふ
人戀しただ人戀し街の夜のどよめく中に身をば投げぬる
留守番のつれづれにふと口笛を吹きけりそれに彼れ應へけり
ぬかるみに道を拾ひてゆく人と吾れとありけり裏町の午後

何處の學校にも兎角、文藝部——雜誌部と運動部は仲が惡い、二高にも多少その傾向が見へる樣である、吾人は本文を起草する初めに蠻勇會起らんかと豫告した、蠻勇會は蓋し起るであらう、第九十號に(ホ)薄井大助と云ふ人の『忌しき藝人根生の發露』と云ふ一文がある、現在の二高には不健全分子がないと云ふ事は出來ぬ、その內に起るだらうと豫期された事は意外に早く來るかもしれぬ、薄井大助の文は、運動部諸員の奢侈をいましめたものであるが、敵は本能寺にあり、蓋し本能寺にあらう、一般柔弱分子に宛てた宣戰布告と吾人は讀んだが、如何。

でも、二高の校歌と尙志會の歌は晩翠子の名殘をとゞめる其の作である、東海遊子吟一流のものが無いでもない。

天は東北——山高く　水清き鄕七州の
光——敎の因るところ　庭のあしたの玲瓏の
霧に塵なし蹈み分くる　われ人生の朝ぼらけ

二高校歌の一節。

青葉山萬古にしげく　廣瀨川千歲清し

靈美の氣其精凝りて　尙志會こゝに起りぬ
ゆたかなる望の光　おのづから異彩を放つ
偉なるかな自然の寵兒　只獨り天籟を占む

尙志會々歌の一節。明善寮の寮歌は、毎年寮生より募集して土井教授に其れを撰擇して貰つて紀念祭當日に發表する。

これは校歌なり寮歌なりであるが、多數の學生にもてはやされるは、『通はしやんせ〳〵滅法矢鱈に通はしやんせ』と云ふのや、『おいとこさうだよ』だの、『さんさ時雨か茅野の雨』かと云ふ名物の唄などである。

註（ホ）薄井君は法學士也、

一一、鹽竈の端艇競漕

端艇部委員は六人ある、艇庫は鹽竈にあり、市に近い廣瀨川にも少し水があつて、端艇でも漕げる樣なところがあればいゝに、さうは參らぬ、端艇部の所有艇は端艇六隻、和船二隻である。

水上運動會――端艇部の大會は、毎年十月乃至十一月秋季皇靈祭後、代ケ崎コースに於て之れを行ふ、當日はゐらい騷ぎであると云ふ。勿論、仙臺から鹽竈へ臨時列車が何回も出る、列車の窓には物見高い仙臺人が乘つて居る、女學生も多い東京の女學生が大學生を狙ひし昔の如く、一段下つて彼れ等は二高生を標的とする。

代ケ崎は馬放島に面して居る海水浴場である、こゝで白く塗つたボートが浮ぶ、帆前が通ふばかりと思つた松島の海に此の頃は勇ましい櫂の音を聞く時となつた、松島の海に近來快走船が浮ぶ、鹽竈は由來仙臺の學生に親しみが多くて、土曜日曜には大抵各學校の生徒の幾人かゞ遊びに來る、仙臺の女學校で遠足をやる時は陸中の一の關――中尊寺見物に行くか、鹽竈松島へ來ると相場が定まつて居る、丁度東京の女學校で稻毛とか江の島鎌倉へ旅行するのと同じである。

或る時、縣立高等女學校の生徒達が鹽竈に遊びに來た、お轉婆な連中吾れ先にと和

船にのり込んで、船頭の制するも聞かず、後から來た人や岸に居る先生の方を見て袂を振つて、先生先生とキャッキャッ騒いで居たが、あまり片つ方の舷に寄りすぎてあゝ危い〳〵と云ふ間に覆りかへつてしまつた、附添の先生達蒼くなつて船頭を督して引つ張り上げる、幸ひに負傷した人はなかつたが、頭の髪から着物に海老茶の袴までビッショリ、リボンの紅が泌んだのを左手で支へて恨めしさうに立つ十何人のしほれた姿を船頭が鉈豆煙管をやに下りにくはゑて、苦い顔をして居た濡れても、小言の云へぬ一同は太田屋の二階に濡れた着物を干して生乾きの奴を着て歸校した、『妾、あの時困りしたア、蝙蝠傘を流して了つて』

と某夫人の話、鹽竈の一笑話柄である、海はあまり美しくない、少し沖へ出ると水も稍美しいが、蒼黑い様な水の只もう磯臭い。

代ケ崎でボートレエスがあると云へば、近郷近在の人々が集つて來る、特に振つて居るのは、漁師の所謂『兄哥』達の應援である、銅色の皮膚に不似合な大漁踊の裾に模様あるのを引つ張つたのも交つて、赤ア、青ウと火花を散らして應援する、それで時々應援軍同志の喧嘩が始まる事もある、それを、今までオールを握つて居た撰手が止めに行く、いや豪い騒ぎ、代ケ崎の端艇競爭は現在に於て仙臺の年中行事の一つとなつて居る。

鹽竈と松島村の間を、俗に八十八島、松島全島を八百八島と云ふ、此の澤山の島の間を白い帆が通ふもいゝが、音もなくツウツウと海を滑て行くボートも結構繪になる

北上の流れ、石の卷の寂びたる欵乃、平泉の故地を訪ふも面白い、遠潛の興味はこゝだ、毎年四五月の頃遠潛を行ふのである。

一二、うはさの聞き書

二高に教授多し、校長の武藤氏以下正教授三十一名助教授二名、講師外人雇教師囑托教員校長まで加へて五十名に餘る。

以下、敏感なる批評家としての生徒の口から教授諸氏評判を聞かう。

A『粟野(健次郎)先生はいゝ人だねえ、先生のうちに遊びに行つたかい。』

B『ウヽン行かないがね、先生は確かに偉い人だよ、十九の年に檢定試驗に合格したと云ふからなあ、日本であれ丈け英文に精しい人は尠いさうだぜ、正則の齋藤秀三郎なぞと比較して何方かと云ふ位ださうだ、粟野先生に(貴方の敬服してお出の方は)と訊くと井上十吉さんをさしたさうだ、フオレストさんねえ、(英人雇教師)あの人も矢張り、ミスターアワノは、ミスター、デニングより偉いだらうと云つて居るさうだ

A『さうか、左樣々々、フオレストさんが、デニングさんに質いて解らぬ難句を粟野先生に教へて貰つたと話したつけ、先生自身も(俺の女房は本と酒だ)と云つて居るからな、一寸云へば支那の李太白に似てるかも知れない。』

B『粟野さんの話の序だが、君達は先生の癖に氣がついたかい、右の手で机の緣に爪を擦るだらう。可笑しな手附だよ、跡で行つて見たら爪の跡だらけだつた、漫錄ものだぜ癖と云へば杉谷(泰山)教授にも隨分癖があるぜ。』

C『さうだ學生聯合演說會の時だつた、先生の癖は永くエーと引つばるのだが數へて見るとそれが六遍にで御座いましてが四遍あつたと云ふ評判さ。』

A『數へる者も數へる者だナ、先生がサブゼクトを必らずズブゼクトと發音させるのを引つゝかまへて、そんなら先生の名はズギタニ先生ですかとやりかへした人もあるとサ、隨分好人物の先生をを捉へて皮肉をやつたものだて。』

B『一寸一寸君――稍小聲――君は此の間先生のところへ行つたさうだが、何とも言はれなかつたかい。』

C『あゝ言はれたよ、言はれた、何かの話の末に(君はあとゝりかね)と訊かれたが僕は何氣なく(いゝえ)と言ひ切つて、例の一件に氣がついて(でも叔母の家を嗣ぐ事となつて居ますから)と漸々の思ひで言ひ拔たよ。お蔭で汗でびしよ濡れになつた、すると先生(そう……か)と長く引つ張つて嘆息して居た、實際ドーターのあの面相ちやア……君もやられたのか、誰でも一度はやられると見へるんだね。』

A『武藤(虎太)先生はあれで寶生流の謠のお師匠さんだとよ、杉谷玉虫小倉なんて教授連も武藤先生の尻について鹽辛聲をはり上げて謠つてるとサ。先生と云へば之れも演說會の時の話だが、講評の時にゼスチユアの批評があまり細微に亙り過ぎて（諸君はあまり手を）とこゝでグッと詰つて眼を白黑して暫らく深呼吸をしてから（ピストンの樣に動かしてはなりませぬ）とやられたが、こいつは聽いてる此方も苦しかつたね。』

B『僕等の方へは出ないが、岡澤(鉦二郎)教授も氣焰があがるかね。』

C『岡澤？あゝ日本文法の自稱博士か、先生時々時事問題をつかまへて思ひ切つた批評を下しては教場を賑はすよ、活氣があつて面白いや。』

A『玉虫(一郎一)教授も土井(林吉)教授もサッパリ沈默してゐるねえ、僕は入學以來玉虫先生のニヤ〳〵した顏は見た時がないね、失戀とか何とか云つた人があるが豈夫と思ふ。』

B『君はテニスが得意だが、古川(邦彦)教授なぞ相變らず見えるかね。』

A『暇さへあれば來る人は、あの先生さな、古川先生はそれにスケヱトが上手だ、テニスとどちらかと云ふ位だ、伊豆沼から歸つて來てから、偉い氣焰ださうだよ。』

B『おい、ミルクのお代り、君もやるだらう、それとジヤミパンを一つ呉れ』

（某月某日、片平町某ミルクホールにて）

一三、牛肉屋と汁粉屋

二高生活の全班を寫すに忙しく學校の徽章たる蜂章はいつの頃から白線の制帽に篏められる――附けられる樣になつたか、と說くのを忘れた。

二高は明治二十七年以前に在つては、第二高等中學校と稱し、これを縮めて云ふ時は自然二中と云ふ安つぽい名であつた、同年夏第二高等學校と改まり、帽子の徽章も以前は肥つた蜂の體の眞中に『二中』と書いてあつたのが改正と同時に文字を除いた痩せぎすの蜂ばかりとなつた。精しく言はゞ、二十七年以前の帽章は蜂章校でなくて

●虹章校であつたのだ、何となれば蜂は四翅で虹は二翅であるからである、改正以前の
は二翅の昆虫であつた之れは後に昆虫學者たる某氏が發見して豈夫途中で易へる事も
なり兼ね、改正の期を待つて居たのであつた。

蜂はもとより勤勉の意味である、一高では徽章のことで一揉めもめた、蜂を一度徽
章に制定しかゝり之れではあまり西洋の眞似過ぎるとて引つ込め、さればとて刀と筆
の打つ交へも子供めく、遂々ミネルバとマルスの象徽として橄欖と柏葉に札がおち、
二高はそのお下りを頂戴した譯である。

二高の學生は、何處で飲んだり食つたりするかと云ふ事を記さう、共に天下の一大
事ではないが、二高を知る人の爲めには、興味がないとも云へない。三度の飯は家庭
やら下宿で食ふ事は勿論の話である、それ以外の飲食の場合をさすのである。

名掛町から裏五番町に曲る角に、三ッ矢牛肉店がある、一人前十五錢から二十錢、
學生さんは十五錢のが多いさうな、酒一本二十錢、二人でお酒つき一圓内外ですむと
云ふ勘定である、夕方こゝの内は大學、二高、工專などの學生で賑あふ。ポウと眼の縁
を赤く染められた頃、二人の話は熟した、『じやア一番町を散歩して櫻ケ岡に出て歸ら
う。』『さうしやう、勘定をして出かけやう』と出るのがお定まりだ。

ハイカラなのは一番町のブラザー軒に行く、ブラザー軒は仙臺に於ける精養軒とも
云ふべき西洋料理店である一度燒けたが再築して盛にやつて居る。三階の高樓である
ブラザー軒のこれ程成功したのは娘のお蔭であると云ふ、出戻りの別嬪の娘あり、其
の娘が客を相手に愛嬌ふりまいて居る内、或る時食事をしに來た大阪の某と云ふ金持
が來て娘を見染め、妻とする契約で結納とし何萬圓かを贈つた、其の金子で一部は娘
の支度金に宛て一部は此の宏莊なる建築をする資金に當てた樣な話だ。

甘ま口なのは新傳馬町の、不動尊境内の汁粉屋に行く、之れを俗に『お不動さん』
と稱して居る、多樂茶屋の汁粉もいゝが此れは田舍者の行く處で、通の行くは『お不
動さん』

我が第二高等學校記事はこれを以て打ち止めとす、引き合ひに出した諸氏に深く謝す、然し要するに吾人が書いたのは過去乃至現在の高等學校で未來の高等學校でない第二高等學校の前途は之れから大いに輝くであらう。

後記　杉谷敬頭は、三井同族會に聘せられ、教育部顧問として赴任した。

第三高等學校

一、京、吉田町の空氣

上る所、下る所、南入る、北入る、西陣織の都、加茂川の流る所、神社佛閣の街。其の京都へ參り候。一と筆御便り申さばや。

出町橋にて電車を下りて、吉田町の一廓に足を蹈み入るゝ時に我等の眼に一種異れる空氣が映り申し候。頭の上に大根、菜の類を載せたる女、白脚袢甲斐々々しく戸毎を『大根お要りやすか』とたづね廻る、其の中より大學通ひの殿原と併せて、櫻に三字の白き三條を帽子に卷いて、ブツク片手の規重面なる若き人々の姿を見出し申し候廻りくどき書き方ながら、之れこそ今回御報道申す神樂ケ岡なる第三高等學校の學生にて候。出町橋を渡り切りたる所より一直線に進み候程に大學裏門に出づ大學の中を脱けて正門より出でし所に第三高等學校があり申し候。

その前に於て、(イ)菊池總長を迎へし帝國大學の文科研究室の新設備を紹介するの光榮を有し度候。一言以て之れを示さば大學生は絶對の自由に於て養はれつゝあり獨逸の學風を模せる絶對の自由を標榜する大學と、近來旗色を變じて絶對の不自由となれる三高と相對せるは面目き比較と存じ候。

註　(イ)菊池氏は已に幾去せり

二、折田先生の慈眼

折田彦市氏は第三高等學校創立以來の古き校長にて候ひき。四十三年十一月二十六日退職し、代りて來りし校長が酒井佐保氏にて候。折田氏の履歴を叙するは、三高の歴史を叙するものにて候。今一卷の卷物を繰り廣げて三高の生ひ立ちと併せて、折田校長が如何に學校と關係深かりしかを說かむ、赤子の慈母に於ける云々の語は此の校長此の生徒に對する尤も正當なる文句にて候ひき。其の校長が學校と分るゝ時、全校生徒の嗚咽涕泣せるもの誠に其の所以無きに非ず、今日折田校長は三高生を己が子供程懷しく思ひ居れる也。時に通學の生徒は途上に於て、車を馳する先生を見出す事あり。先生帽を傾け莞爾として、然も懷しさうな瞳をして過ぐるを常とせり。

三高の創りは明治元年、舍密局の大阪に設けられしに端を拓く、舍密局と洋學校とは理學所と開成所に變り、併せて第四大學を第一番中學、開明學校、大阪外國語學校同英語學校、同專門學校、大阪中學校、大學分校を經、十九年第三高等中學校二十七年十遍目に今の名に落ち付きたり。其の間、土地は大阪より吉田町に移り敷地を大學に讓りて今の場所に轉ず。折田氏は實に三高の卵が孵化しかゝりし時より手しほにかけて育て上げし人也。

三、酒井校長の評判

酒井氏は、岡山第六高等學校より轉じて折田氏の跡を襲へるものにて候。

酒井氏の官僚肌?に比し、折田氏は殆ど明け放したる態度を以て學生に接し、學生の氏を尊崇するもの今の何十年勤續と云ふ其の年限に敬意を表するものとは意味を異

に致し候。

折田氏の自由に教育されし三高生は、今や岡山に於て幾分干渉の人として小耳に挾み居たる酒井校長を迎へたり、穏和なる京都の水を呑んで育てども、豈に沸騰せずして止まんや、東京大阪、各新聞紙の報道せし程騒ぎしには有らねど、兎も角大部分の學生は新校長に對して不滿を抱き申し候。

折田氏の告別式が號泣を以て送くられし反動も有る也、酒井氏が就任の式辭に稍激越の辭句を交へ、折田氏の功勞を賞めざりしも理由する也。穏和派の一人は酒井氏が來りてより直ちに校論の沸騰せるてふ事實に對し解釋を與へて曰く。

『極度の自由に養はれし人が、其の保護者を失ふ場合には、跡から來る人が如何なる人物であらうと騒ぐのは普通の事である、殊に日本人本來の氣質として舊い人が去るのに對する一種の同情が反撥的に新參の人に見舞つたのである』

小生は其れに對し何等の註釋をなすを欲せず候。然し京都は京都也。今は波休まりて大分枕高く眠れる樣也。酒井氏に對する反感、近者稍勢衰へて見ゆるとぞ。

四、野球大會の開催

三高の校友會は嶽水會と申し候。比叡山と加茂川の水から採つた名の由聽き及び候會長は酒井校長、副會長は生徒監林和太郎氏、白髯の好老爺也。其の他規則の如き月並にして殊更紹介の要を見ず、只、委員の名を理事と云ふのみ、各部恨みつらみの無い樣に一部二部三部各一人を提して理事とす。

嶽水會は十一部に分つ。此の頃野球部を設け大分盛也。三高の名物としては毎年十一月の天長節前後に開催する關西野球大會を擧げざる可らず、好球兒期せずして神樂岡の一角に集まる。野球は特に三高の牛耳りつゝある所也。

嶽水會の雜誌は格別變りし模樣御座なく候。矢つ張り、詩やら小說やらがのり居れり。『餓えたるはわが感情の奥に住む、焰の如き唇の蛇』など云ふあり。

五、寄宿舍と其の歌

學校の寄宿舍は全部の十分一をも收むるに足らぬ有樣にて候。設備は硝整へり。圖書館なども附屬し玄關先に赤字の札をかけ小包なら小包とし其の人の名札をかけて知らせる樣にしてあり、不都合者は總代なる者がありて決議事項を掲示場にはり出す、それが爲め餘り惡い人出ですとぞ。學生は寄宿舍と家庭と下宿の三つより通學す、最も多きものは下宿にして然も土地の風として大抵は部屋丈け貸すの也。部屋を借りて食事丈け學校で爲す。一日分二十三錢、あんまり高からざるべし。寄宿舍の歌あり。錄す。

（一）

湯氣立ち登る　食堂の
青鼻汁垂す　賄の
米、南京の砂混り
嚙めども切れぬ牛肉に

中は眞黑に染められて
顎におどろの髭疎ら
茶は山吹の色も濃く
吾が三寸の舌倦るし

（二）

人造地震の音高く
身を切る風のうら寒く
目に入る塵を帚もて
枕々　闕に立て籠る

黑暗々〜の夜の床
電燈暗き寢室に
四邊構はず掃き散す
三舍の健兒百餘名

（三）

阿彌陀が時々火を焚いて
蒸氣は兎角途絕へ勝ち
風邪罹くもの〻多ければ
得意の鼻を動めかし
以下略

機械に油を注げども
吾等に風邪を引かす也
喜ぶ者は虎脚氣
人力車なば馳せて來る

虎脚氣とは實に面白き名也、此の事後に說く。

註。「阿彌陀」とは小使某の綽名にして、三四年前に逝去せる由。

六、ドクトル虎脚氣

三高の各教授を通じ、人氣あるは山内教授（普卿）なるべく候。此の人の受け持ちは漢文なれど本文は一二行しか講議せず其の跡は駄洒落で固めた話し振り也。其のもてる事異常なり。林教授（森太郎）國語は朗々として徹つた聲で名が賣れ。新來の安藤勝一郎學士、同じく徹つた聲で著聞す。譯が素敵にうまく、厨川教授と共に評判よし。（一）厨川辰夫氏、文壇の名は白村、詩を譯するのは天下一品の稱あり。近代文學十講の著者。駄辯の筆頭としては内田教授（新也）を擧ぐべし。此の先生。すこしく油をかければ縷々として一時間位の講義お茶の子也。但し生徒の理會すると否とは保證の限りに非ず。先日も嘗て笑はぬ生徒を笑したことあり、先生も一個濟生會顧問の資格あり。文士としては、以上の厨川白村の他に、橋本青雨（忠夫）成瀬無極（清）（二）茅野蕭々（儀太郎）等が候。

教授にはあらねど、鐘つき爺と名物書記リンコルンあり。虎脚氣の綽名ある校醫あり。鐘搗きの爺と云ふは、不幸名を逸し候へ共、何でも創立以來此の學校の御厄介になり居る由にて候。此の人のつき振りは奥義の域に達し、吃度二つ半づゝ綱を打ち振るの也。『あの爺さんがついてるぜ』遠く放れて居ても三高生は直ちに此の音を直覺す、それ程名人也、字をよくす。到底高等學校生徒のノートに走らす蟹文字の比に非ず。書記リンコルン。彼れも亦奇人なるかな。此の人、何でも古い天文學者の末裔の由にて暦を見るの名人也、一年中、苦蟲かみつぶした樣な顏にして、名は若杉保定と云ふ。風變りせる人なり、三高評論、こゝに此の人を畫くの名譽を有す。

虎脚氣氏とは、前校醫從五位勳六等鈴木宗泰氏の事にして短軀枯瘦、色頗る黑かりし由、一名日焦け茄子の名ありきとぞ。英語もうまし、有數なる催眠術學者にして、脊の低い癖に柔道二段なり。先生虎列刺の初期を診斷して『こらア、脚氣だよ』虎はコレラの虎也。虎脚氣の名、實に意味深遠ならずや。

註。（一）厨川君はその後、京都文科助教授に轉任し、米國に留學して先頃歸朝せり。（二）茅野君は辭職して

慶應義塾醫科教授となり獨語を教授せり。(三)虎脚氣氏は二三年前死去し現在は第二世也。

七、校長に望むらく

京都の高等學校の生徒はどうしても穩和しく出來て居る樣なり、左れども一高や五高に見る樣な趣きはトント見るを得ず候。酒井校長に一寸反對はして見たものゝ、さう〳〵何時までも痩せ肱を張つては居られざるならむ。

酒井校長と折田校長とは全く異れる主義の人にて候、冷たい氷をのみつけた人が急に熱いお湯を強いられた樣な心地致し候。吾人はちと利口すぎた口前かしらねど、極端に自由と云ふも多少の弊害を見るべく、氷の口あたりよくて腸に惡きに似たり。

極端なる干渉主義も考へ物なれど、酒井校長就職後の事情を見るに、休み勝な諸教授までも精出して勉强する所を見れば、決して惡い事なるまじく、此の上は酒井校長の手腕として、熱い湯は適度に吹き冷して、のませると、一寸まア、斯う云ふ寸法に願ひ度しと存じ候。

吉田町の一角、日に〳〵新なる家は立ち勝り行く。神樂ヶ岡の西麓に初冬の日は快く光を投ぐ。三高よ、汝は永久に醇化されたる學風を理想とし、國家有爲の人材の呑吐を無意義なる三年間の生活として看過する事なく、巍然たる比叡の山のそれの如く悠々たる加茂の流れそれの如く、倦ずたゆまず汝の天分をつくすべし。月並ながら三高に就て言んとする事は完れり、さらば。

後記　酒井校長は、大正七年十二月死去し、その後任に、岡山六高校長金子銓太郎氏が來任した。

第四高等學校

一、赤い煉瓦の學校

東海道線の急行を、米原驛から乘り換へた北國行の汽車は、實にまだるつこい位に遲い。コトリと動き出すかと思ふとゴトリと停る。おまけに車臺が小さいと來て居るので、旅行子の不平が一方でない。此の頃と云へ共灰色の北國の空は見るからに陰暗な、底に言ふ可らざる冷たさを含んで、北〳〵へと進む身は、一箇の袋の中に入る樣な氣持がする。

其の汽車が數時間の後に金澤に達する。加州百萬石の城下である。北國の小さい家を見馴れて失望し切つた心も、此の北國での名だゝ都へ來て、幾分柔らぐのである幾つかの隧道に黑くなつて。そして鷄の肌の樣に毛穴立つた頰を撫でゝ百萬石の城下に下りた旅客は、停車場から眞つ直ぐに走つた坦道を直ちに發見する。

金澤には兼六公園と言つて、有名なる公園がある、公園より西へ程遠からずして、光りの衰へた日光に映じて赤い煉瓦の建物が陰見するのを見るであらう。其れが第四高等學校、場所は市內廣阪通り、石川縣廳の隣地にある。舊前田侯の邸宅である。

二、超然主義の興隆

金澤の四高は、由來、あまり評判がよくなかつた。成績のあまり振はぬ人丈けが行く樣にも言はれ、粗暴な人達の巢窟である樣にも言はれた。其の噂は何に基くか判然した事は言へぬが、往年、菊池幽芳氏が大阪每日紙上に公けにした小說「寒潮」の主人公が、卽ち四高生を題材とし金澤の天地を假り來つて描寫の精緻を極めたと云ふ。四高生は之れに尠からず誇りを傷けられて、爾來大いに自重して、今日では全く昔日と打つて變つた有樣になつた樣に風聞する。

まだ其の他にも理由がある。一部の硬派分子を中心として、校內を統一しつゝある思想を名けて四高の『超然主義』と云ふ。超然主義が如何なる理由の下に成立し萠芽し

將又存續して居るか、之れを說明するは興味ある問題に相違ない。

四高には時習寮と呼ぶ寄宿舍がある。南中北の三寮と、寮務寮と併せて四棟。其の名は論語の「學而時習之不亦悅乎」から出て居るのだ相だ。廿六年十月に建てられ、廿九年の二月と云ふに、北寮を殘して南寮中寮の二棟は誤つて火を失し、跡方も無く燒けてしまつた。學校では應急の處置として、南中の二寮生に勝手に退寮を許可したが、其の時、北寮にウンと蹈み止まつた連中が都合三十八名。

校外へ行くのは自由にして、生徒の大部分は喜んで自由な放縱な天地の生活を謳歌しつゝ去つて了つた。殘つた三十八名は此の際、假令、少數なり共踏み止まつて、確固たる校風をつくり、校內の人々を感化して四高生の位置を高めやう！　こんな默契が一同の間に成立し、興奮した心を抑へてサテ、唱へ出したのが『超然主義』

但し、こゝには說明が要る。超然と云ふと自分一人超然として他人を顧みず行くかの樣であるが、之れは滔々たる惡風の中に超然として、そして、他人を感化し同主義に導く、地の鹽とならうと云ふのである。當分は通學生と寄宿生の間に葛藤も見られたが、追々お互に了解し合つて、今の四高生は大體に於て『超然主義』の定規で略、ゆきたけが同じ樣に揃ふ程になつて來た。

三、牛乳代二錢五厘

今の樣な理由で、尠く共時習寮の在學生は校內の最良分子と見做されて居る。それで入寮生も一年生の時に人選をして入れる。入れてから惡くなつたものはあまり無い。

寮の建て方は燒失後の再建で、新らしい式を採用し、自習室は八人を以て限りとし兩端に寢室があり、光線の出入りも惡くない。現在生徒二百四十人である。食事は同じく自炊制度で他校と變りはない。

金澤へ來て、特筆するに足るは、物價の低廉である。日本海を控えたお蔭で、魚肉に牛豚肉は夥しくやすい。滋養物を食べるには此の地方へ來るべしである。寮では又た寮の事業として、裏手の牧場で養牛をして居る。其の數七八頭、モウ、モウと朝晩八釜

しい、牛乳代一合二錢五厘と云ふ飛び切り、生徒も教員も、又た市民へも配達をする。只、閉口なのは天氣の惡い事だ。毎年、十一二月から、翌年の三月頃まで、天地は雪に封ぜられて仕舞ふ。

寄宿舍の窓から白山颪がサッと吹き込む。おい君、もつと暖爐を焚くべし！

四、熊先生の無頓著

先生で評判のいゝのは(一)今井教授であらう。靜岡の人、先生にはロスコーとも、十八世紀とも綽名がある。先生の講義がロスコー一點張りだからである。然し此の頃最新のホーレマン式を用ゐはじめたから綽名も取り下げねばなるまい。

分析科學で二部の先生、答案が違つてると小聲で『やり直しイ』點がよいので就中評判がいゝんだと。

西(英盛)教授は物理の先生である。脊が低くて頭が大きい。講壇の上でテエブルより超越しやうと脊延びをする先生の態度は正に見物である。一名タイプライター、十年一日の如く同じ講義なれば也。但し、指名をされて先生の教へた事と一字一句違つてるといけない。宮川(熊三郎)教授は漢文の先生、熊の綽名あるは、熊三郎の名から來た計りではない、一つは色が黑くてむしやむしやの鬚が顏の七分通り埋めて居るが故に。『先生』と云ふと、ケロリとして默つて眼をパチ〳〵して居る、おや、聞えなかつたかしらんと別の事を考へてると、五分位たつてから『ハアイ』と來る。

重光(現在遞信技師)教授と云ふは造船科出身工學士のバリバリ、此の人の鼻の下と、而して、尖りたる顎を注意せよ。

先生の顎は大阪役者の顎と似て、それより今少しく見苦しい。先生の眼は先生があまりに學術の研究に熱心であるが爲め。漸次奥深く背進して、正に後腦と接觸する斗りになつて居る。——先生は金澤へ來て奥樣を迎へた。

果然！果然！。先生の鼻下が薄す黑くなりはじめた。之れを稱して鬚と云ふ、然し鬚と云ふべく先生の鼻下に發生しつゝある新現象は、あまりにブーアである。

星野(信之)教授、此の人は、教授より寧ろエンジニアの方がよかつたらうとの下馬評がある。

(二)水蘆教授は英語の先生、傍ら宣教師をつとめて居る。あまり秀才でないとの評あり、生徒から難問を持ち出されると『兎に角此方の方がベターホームだ』と逃げる癖あり、岡本(勇)教授は文學士、脊が小さい。それでも洋行歸り、ロンドンの話をする事が大得意である。生徒の方でも其のコツを覺え込み、些と難しい問題が出さうな時は『先生倫敦塔の話をうかゝひます』機嫌忽ち一變すると云ふ。同じ人、『カッチングオンリイ』の綽名あり。桑港で或る理髮店に入り、先方の云ふまゝにウン〳〵と幾通りもの香水をつけさせて納まつて居たが、勘定書を見ると十弗近くとられ蒼くなりそれから何處へ行つても『カッチングオンリイ』

(三)西川さんは校中で一番肥滿して居る。然し氣は無邪氣である。遠足部及び旅行にいつも脚袢をつけてやつて來るのは先生で、一番にへこたれるのも先生である。

註。(一)今井氏。(二)水蘆氏在職せず。(三)西川氏五高へ轉任と記憶す。

五、遠足部の道案内

西川さんで思ひ出すのが遠足部である。四高の校友會は北辰會と名く。その中で講演、語學、音樂、雜誌、弓術、劍道柔道、野球、庭球、遠足、端艇の各部に分つ。

雨の降つて運動が餘計に出來ぬくせとして、野球庭球が發達せぬ自然の趨勢。山國の特點は遠足部をして長足の進歩を促進せしめた。

越前、加賀、能登へかけて跋渉する所は多い。

白山はつい眼の前にあり、飛驒山脈も近く迫つて居る。二部生の連中はひまさへ有れば採集箱と、ハンマーを持つて、木の根岩角をよぢ上る。

金澤附近の山へ上つた人は、道が二又、三又の迷路に出會した度毎に、一箇の棒杭に右とか、左とか簡單なる案内を附したるものを見るであらう。今では、田舍の小學校の生徒がよくやつて居るが。

これが四高遠足部生の親切になる道標である。

四高の校長は今まで六代も變つた。卅五年來の吉村校長は可も無く、不可も無きていの人物であつたが、先頃更迭して新しい溝淵校長を迎へた。氏は土佐の人、廿八年哲學科出の文學士だ。運動が大好きである。

新校長の人物は吾人はあまり委しく承知して居ない。元來、高等學校の校長なるものは、それ程敏腕の必要もなく、只、其の人格は生徒と教授を推服せしむるに足り、そして幾分の行政的の頭を持つた人なれば誰でもつとまる。

新校長にのぞむらく、時習寮、つまり校内思潮の一部分は超然主義に收まつて居るけれ共、校外に於ける多數の學生の生活は、校内に於ける彼等の生活程に純なるものと思はれぬ。と云ふ事である。

金澤と寒い聯想、寒さと炬燵の聯想、學生と素人下宿の聯想、炬燵と不品行の聯想大部分の人々には未だ此等の聯想がある。打ち消すには何ぞ、例の超然主義でも何でもいゝ。確固たる校風をつくり、一般學生の頭に――普遍的に、お互を自重させたら四高の地位は高まるに相違ない。

六、數學は惡くない

野球、庭球の拙い四高では柔道、擊劍は相當にやる。家の中に籠るから割合に勉強する。一般的に數學の智識が惡くない。

皇太子殿下行啓の時、四高生の兵式體操が大層御感に入つたさうだ。それで一と口に評すると四高は評判程惡くないと云ふ事になる。

――四高南下隊の歌――

士曜日の夕、山田屋の窓の下を通れば、おや、二階で唄ふ聲が。

音に血を盛る瓶ならば、五尺の男子要なきも。高打つ心臓の陣太鼓、雷の響を傳へつゝ。不滅の眞理戰鬪に、進めと鳴るを如何せん。

第五高等學校

一、本場の「三四郎」君

厭やですよ。ハイカラ角帽の醫學生。私しの好きな龍田五高の白三筋、破れ袴に白三筋、剛毅朴訥アこんなもんかれエ。チヨイとれッ。

前提として俗謠一つ、サテ、こゝに記す、本場の『三四郎。』

肥後の熊本は肥後米の本場にして、又た『三四郎』の本場なり。三四郎とは故夏目漱石先生の命名し玉へる處、龍田五校の白三筋、腰にタオルをブラつかせたる吾が五高生の名譽ある代名詞なり。

第五高等學校は熊本市外黑髮村に在り、土地の面積はコーッと五萬千二百六坪と一合六勺、同じく建て坪千二百四十六坪五合三勺九才と申すが數字の示す處、現校長吉岡鄉甫氏、古い歷史を搔いつまんで申し上げやう。

抑も〳〵の創りは二十年五月、最初は市内櫻井町にあり、古城町に移り、今の校舍に移つて、初代校長野村彦四郎、二十二年校長非職となり、西村教授が校長事務取扱二十三年に京都の三高の幹事平山太郎氏が校長になつて來て、其の十月十日に開校式を擧げた。翌年六月平山さんが死んで嘉納治五郎さんが校長、二十六年に轉任して跡に中川元氏が校長になつた。三十三年に中川さんが二高に轉任し、櫻井房記教授が校長に任ぜられ、三十九年まで何事も無かつたものゝ、突然所謂『栗野事件』なるものが持ち上つたので、校長其の他四五の教授が引責辭職し、其れの跡釜へ山口高商から松浦さんが乘り込んで來たのである。松浦さんは大正二年十月に辭職して、文部省視學官吉岡鄉甫氏がその跡へ乘り込んで來た。

一高の蠻殼は、中にも多少の附け燒刃も無きにしも非ず。五高の蠻殼は境遇が許さんのである。周圍が蠻に仕立て上げて呉れるのである。未だ中學等には、蝙蝠傘を持つて行くと叩き折られる處無きにしも非ず。一高の徽章に一寸似たのは白三筋、弊衣

破帽を實地に示して町を肩で風を切つて歩く。

熊本も亦た學生のもてる土地である。五高の生徒さんと云へば、何處へ行つても優遇する。假に下宿屋へ醫專の角帽を冠つて行つて見玉へ、下宿の親爺眼玉を剝いて斷る。其の後から五高生が行くと調子がガラリと變る。娘が居ても安心して宿める、高工も醫專も斯うなつたら足元へも追つかぬ。

二、學業の出來榮え

五高の卒業生は、四十三年末まで二千五百七十三名に上る、而して博士も相當に出て居る。黑板博士は第二回の卒業生だ、學士院の授賞によりすつかり評判をあげた寺田寅彦博士など其の出身者である。

學業の成績は決して劣ると言はれない。大學に進んで銀時計を狙つてる連中も尠くない、大體は九州の人であるが、中でも熊本は勝れて成績がよい。力技になると妙なもので、福岡人は柔道が上手で、熊本人は劍道がうまい。之れも先づ大部分九州の各學校を牛耳つて居る。鹿兒島の造士館等も此の點へかけては齒も立たぬとの評がある。

五高生の温順しいと云ふには、二ツの原因がある。一つは周圍の事情である。一つは代々校長の德望である。つまり五高の生徒があばれたとあつても學校全體の沽券に關する譯だからと愼んで居るのと、も一つも校長に反抗が出來ぬ事情があるからである。

松浦前校長の職分論は蓋し有名なるものであつた。敎頭は覇氣に富む。

温順しい阿父さん、勝氣な阿母さんに抱かれた五高生は、それに傍から『坊ちやんはいゝ子ねえ』と好い兒呼はりをされる爲め、暴れも出來ぬ子供の樣な境遇に居るのである。

三、先生に籠を冠す

『おどんげん學校んゴツ、景色のえゝ、空氣のえゝ處は外にや有るみやあ。』

斯う云はせる事程左樣に、五高は熊本市外の高臺に超然として嘯いて居るのである。北に龍田山あり。白川は其の傍近く流れ、阿蘇の煙は緩く南に流れて、それに學校の周圍は亭々たる松林を以て圍まれて居る。

秋の朝、散歩をした寮生は、其の松の下で初茸を三つ程探し出した。夏の日。此の松の下は格好の休憩所になる。

本館の後部に南寮、北寮、新寮と云ふ寄宿舍がある。規模、三百五十人を容るゝに足る。其のやり方は一高二高に同じ、經費から炊事委員を置いた具合から、それでつまらぬ處まで、一高の眞似をしたものである。曰くストオムと萬年床、それに寮雨。

今夜あたり屹度來るなと、心待ちして居れば、消燈時間が來ると間も無く、ガチヤ〳〵〳〵洗面用のバケツを箒で叩き立てた遠征隊が來る。此方も早速應戰する。三時頃まで叩き廻ることもある。今は昔なりき、生徒監の奥太一郎先生。別に憎まれて居た模樣もないが、或る夜寮務室へ襲來され、頭から鷄籠を冠せられた。此の手數のかゝつた惡戲をした先生、今は學士としてそんじよ其處らに口を拭つて居るかも知れない。

四、五高の七不思議

五高に七不思議と云ふがある。

第一は本館の玄關が開くこと、之れを見たもの蓋し小數だ。但し別に意味なし。先生達が控室から教室へ行くに通る必要がないから、其の儘閉めて置くのサ。

第二、校長邸傍の古井戸。

第三、稚兒の泣き聲、五高の生徒は正門と中門の間の橋の邊で吃度ポン〳〵拍手する。其の拍手が土地と風位の關係から、本館の壁へ響いてキヤン〳〵と云ふ樣な音がする。それが稚兒の泣き聲、聞いて見ればナアンだ。

第四、校門前の栴檀の木、雨のしよぼ〳〵降る日に、此の木の根元で小便をすると吃度袴の裾か何かに鮮血がベツタリと附いて居る相じや。

第五、北寮の東便所、何でも用便して居ると、下から狸が黒い手でお尻を撫でる。

第六、北寮十三番、開けずの室、此の室へ入つた人は家庭に不幸があると云ふ。第七は忘れたが、こんな馬鹿〳〵しいものだ。

幽靈の正體見たり枯尾花……か。

五、委員の選擧競爭

學校の學友會を龍南會と稱する。演說、雜誌、擊劍、柔道、弓術、野球、庭球、端艇、水泳の各部に分つ。會長は校長、副會長は杉山敎授、各部長は敎授を以て宛つ、但し他校と變つて居るのは、各部委員の上に總務委員と云ふのがあり、夫れが主として會務を執つて居る事である。實權は總務委員の手にある。總務委員も又た一部より一名、二部三部を併せて一名、都合二名、生徒の有力なる者が選出せられる。之れになるのは絕大の名譽で、競爭者が非常に多い。

在學通學を併せ、生徒の宗敎的團體としては佛敎青年會と華陵會がある。華陵會とは基督敎青年會の別名である。相當によく働く、華陵會では學校の近所に家を持つて居る。佛敎青年會は坪井にある、昨年あたり會堂を建てる爲め大分活動し、活動寫眞など持ち廻つて遊說し歩き數千の資金を調達したと云ふ。

各部の敎授も哲學科出身の文學士が居るので、此の會の方へ力瘤を入れて呉れる人が多い。宇佐見(全賢)敎授の如き熱心なものである。

五高を書いて水鄕生の事を忘る可からず、水鄕とは號にして小說を好んで書く、名は(一)江口渙、一部三年である。小說を書くからニヤケ男かと云ふに然らず、七分の彌次氣を以て生れて來た男である。バットを振り廻してフレーフレー位はやり兼ねぬ怜悧なる運動部は、此の人をマネージャーに擔ぎ上げて居る。

容貌魁偉と云つたらいゝのだが、眼は眼、鼻は鼻と分離して居るので、決して美男子と申す男振でない。先生腦漿を絞つて、遂に頰邊から顎へかけて房々と鬚を生やした。其の房々とした鬚は、顏の外輪を緣取つて風にそよげる樣は、丁度聯隊旗の房の

樣である。誰云ふとなくオイ『聯隊旗』君！

先生聊か悄氣て近來無髯、何とか新機軸をとの考案中である。

註。(一)江口君は文學士となつた、文藝評論家として評判のよい人だ。

六、「小包」と云ふこと

武夫原頭に草萠えて、花の香甘く夢に入り、龍田の山に秋逝いて、雁が音遠き月影に、高く聳ゆる三寮の、歴史やうつる十四年。(寮歌の一節)

五高の運動場を武夫原と稱する。其の據り所は未だ判らぬが、兎も角、武夫原は五高の誇りである。春から秋へかけ、青々とした草原の運動場としては理想的、それに大輪の月見草が毎年期を定めて夕月に匂ふ。垣の外はげんげ畑、春から秋へかけては何とも云へぬ眺めである。

午後の日を脊に受けて、ノートを懐中に寢轉ぶ學生の三々五々。

『紀念祭の飾り物は濟みましたか。』

『いゝえ、あゝたん處は？』

『もうちやアンと出來とる。毎年二部の奴どんが肝太うむかるけん。今度ごま勝とうと思ふとります。』

『又た鏡ば借りて來て風呂敷ば冠せち、お休憩所の札ば下げといて女子ばたまがらするか。』

『貴方昨夜は大分遲かつたごたる。』

『小包たい、貴方。』

學校の正門は開けつ放しであるが、寮は一定の時間後玄關が締まる。遲く歸つた生徒は、玄關側の郵便や小包を出し入れする窓から忍び込んで室に歸る、彼等は之れを『小包』と稱して居るのである。

七、二部の守り本尊

五高も歴史が古い丈け、種々骨董的な人物も多い。門衛に大隈伯に似た男と少杉山

先生と云ふのがある。更に名物の名をはづかしめぬは、賄方の立山と云ふオヤヂであらう。

此の爺は何年となく五高に勤め、今は米屋町に娘の手で莨屋をやらして居る。嘗て五高生徒たりし小橋内務次官などから、年賀狀が年々來るのをお寶として喜ぶ。寧ろ無邪氣な親爺で、且つ揚言して曰く『うちの娘は學士でのしにや、やらんばい』

二部の守り本尊は杉山(岩三郎)教授である。四十三年二十年勤續祝賀會を開かれ、金四百圓と百科辭典を贈られた古い理學士、各直轄校を通じて少ない部任教授で數學の主任である。先生の腦は決してよいとは認められぬが、反覆して叮嚀に教へると云ふので尊敬される。頭の禿けた、丈けの低い人であるが、これで若い時は雄辯家で、年と共に折角の雄辯が磨り切れたのだとの評判た。

白壁(儀次郎)教授はノートを汚なくさせるに妙を得、教頭の(一)由比教授は不得要領で有名。平塚(忠之助)教授はノートが美しいから、タイプライターの綽名がある。

或ひはノートの通りに言つて居るのでは無いかと思はれる位である。宇佐見(全賢)教授は哲學演說と身長の低いのを以て著れ、長谷川(貞一郎)教授は酒を飲むので有名也。

野々口(勝太郎)教授は漢文を教へるに『私に言はして下さい』と云つて其の謙遜さに推服されて居る。風采のよいのは江部(淳夫)教授。ハイカラは(二)杉山教授(道香)常に香水を放さぬ人として著聞す。

逸してならぬは(三)桑野(禮造)教授である、高等常識と綽名され、何でも知つて居るので有名。本職は獨逸語であるが、清語も出來れば、醫術開業試驗の後期までとつて居るとの評判。未だ獨身で下宿住である。

註。(一)由比氏は吉岡校長就任と共に三高に轉任し、(二)杉山氏は在職せず、(三)桑野氏は或る年、海水浴場で不慮の横死を遂げた。

八、校風論大に起る

第五高等學校は、四十三年にいたり一二の不良分子を出したる爲め、校風論大いに起り、松浦校長は涙を振つて斷然たる處置に及んだ、以來浪收まりて、外面的には今日の處和氣藹々あるものである。恐らく此の平和は、九州人の氣質から剛毅朴訥、正直な一本調子と云ふ點が取り去られぬ限りは打ち續くであらう。

今日の評價は、朴訥なる點にある。吉岡校長の評判にいたりては、多くを知らないが、決して前校長に比して惡くはない樣である。時代は進む。そして五高の生徒も其の朴訥に常識のコロモをかけられて行くであらう。

第六高等學校

一、三十三年の開校

六校の事。

六校は岡山市にあり、もつと委しく説明すれば、岡山市大字門田字山手屋敷及び、同市大字田中にまたがつた土地で、建物は木造を主とし、全坪數二萬千八百七十八坪四合一勺、建物坪數三千二百十七坪七合七勺六才、元來云ふと田を埋め立てた土地で海とは大分距つて居るものゝ海嘯やら洪水が怖いから平坦が普通な此の土地へ持つて來て、グット澤山上置きの土を置いたんじやさうだ。

宜なるかな、直ぐ御近所は水田にして、此のすこし先の五月頃になると、蛙がギヤーギヤー喧ましく鳴き立てる。後に操山あり、前に旭川あり、市内と名はついたれど閑靜な處である。トツトツと操山の天邊に駈け上り双手をかざして見渡せば、汽車が

通る海が光る、茫乎として遙かに霞むで見えるのは四國の連山か。

と言ふと見て來た樣であるが、實は知らぬ人の話を耳にして、恁うも有らうか、と云ふ處を書きつけたのである。

學校は三十三年の、三月二十九日を以て設立され、同四月十三日に開校した。京都の高等學校から酒井教授が來て校長に座し、校長一名、教授七人、助教授四人、書記四人と云ふ、之れがまア規定であつた。時勢の進轉や寔に迅速なり矣、現在の高等學校制度は教授二十八人を要する時代となつた。今日まで、四十四年度までの卒業生全數千百二十一名、尤も創立日猶ほ淺しと云ふんだから敢て言ひ譯をして置くが、偉い人が出て居らぬ。醫學博士が七八人に、工學博士が一人、農學博士一人二部の卒業生には以前飛行機で知られた奈良原工學士が居る。

岡山市は新太郎少將と熊澤蕃山を以て著れ、日本一の吉備團子を以て著れ、三公園の一として後樂園を有することを誇つて居るが、實は一度も行つた事がない。

郷里九州へ歸省の都度、上京の都度、丁度七八遍も岡山を通過したが折惡く、黄昏か夜中で、電燈のカッと明るい中を驛夫の『おかアやまア、おかアやまア』と列車の窓とすれ〳〵に早足に過るのや、名物、吉備團子――名物の名に洩れずまづい――を賣つて歩く男の聲等で薄つすらと記臆に存じて居る丈けである。お恥しい話であるが右樣な譯だ。

二、金子校長の評判

（以下大學を卒業して間も無き人と、新しく大學に入りしまだ新しき角帽の人との對話）

『よう、やつて來たねえ、君のところの阿父さんは變りは無いかい。』

『有り難う、先からお訪ねしやうと思つて居たけど、つい忙しかつたものですから、でも何ですね、學校を出て此方へ來ると肩巾のつまつて居たのが、誰にも制肘される事が無い爲め、思ふ存分延せて愉快ですね。』

『そりや、そうさ實際何だからねえ、あの學校の監督教授政策はいゝに相違はないだ

らうけれ共、酒井(佐保)さんから大分いぢめられたからねえ。先生京都へ行つても大分旗色が惡かつた相だな。那麽話を一寸聞いたよ。六高凡ては酒井さんの貴重――まア貴重なる遺物だからね。成功してるものらうし、失敗してるのも有らうサ。何しろ文部省のお覺え芽出度いから酒井さんは萬々歲だ。』

『時に今度の金子さん(銓太郎校長)はどうです』

『それがね、斯うなんですよ。酒井さんも岡山では相當に受けて居て、京都へ移る少し前に評判が落ちたんでせう、然るに、生徒の期待とは外れて金子さんと來たら前にも增した頑固屋で、箸にも棒にもてえ代物ださうですよ、斯う申しちや失禮だけれど法學士で大尉と來てるんだからなあ。此の分なら酒井さんの方が却つて宜かつたと零してましたつけ。』

『さうかねえ。』

註に曰く酒井氏の監督敎授政策とは、酒井氏が就任早々はじめた事で、敎授の數に當てゝ、寄宿寮以外通學の生徒を割り當て、割り當てられた生徒は其の敎授の下に馳せ參じて、一身上の相談から、忠告を受くべきは受け家庭的な方面では、敎授の家庭へ押しかけて睦まじくすると云ふ、左程思ひ付ではないが、場所次第では面白い政策である。

三、娛樂部と其仕事

『大渡さん(忠太郎)はやつぱり植物園をやつて居るかね。先生も又た一箇篤學の士だねえ。娛樂部の近況はどうです。僕等も暇さへ有りやア、彼處でピンポン何かで騷いだものサ、例のお媼さんは健在かね。』

『えゝ、二人共健在です。なか〳〵宜く賣れます、娛樂部の日用品を賣る處はもと西洋料理屋が有つたんですてね。』

『ウゝ、君等は未だ知るまいが有つたんだ、あまり横暴、といふのでもないが、彼奴等にやらしては損だとの議論が持ち上つて居たから、洋食屋を止して今の樣に委員が

主として媼さんを使ふ樣になつたんだ。』

『さう〳〵、那麽話をきいた、此方でも慶應に消費組合と云ふのが有るさうですが、あの制度も同じですね。娯樂部では、貴方は音樂會等へ出ていらつしやりはしなかつたですか、△△と云ふ名前を誰かが言つて居ましたが』

『斡旋はした事もあるけれど、僕見たいなものは、音樂等やる柄でないからなあ。先生達に謠が流行つて居るて本統かい、君』

『本統です、垣根越しに聽く事が有ります大分名人がある樣です。』

六高には娯樂部と云ふのが有る、建物の一部を學生の日用品販賣所に宛て、一部をピンポンやら碁將棋を備へて生徒の遊び所に宛てゝある。日用品の賣れ高は委員に於て決算し、其の收入高を以て一年一回大音樂會を開く。

序ながら申し置く、六高の校友會には野球庭球擊劍柔道と、世間並なのをのけて、英語部と獨逸語部と云ふのがある。時々會を開き、ドラマ――まアドラマと言ふんださうだ――をやる、外國語學校あたり程うまく無いけれ共、六高年中行事中逸す可からざる事柄である。

四、盛大なる紀念祭

『もう彼方も梅が咲いたらう、と云ふと明日の紀元節は寮の紀念祭だ。近來、却々盛にやるさうじやないか。』

『別に盛と云ふ程でも、でも大分見物人が來ますよ。山陽女學校の生徒なんかやつて來るです、此方の一高の紀念祭は盛ですつてね、三月の一日では、直ぐだから見物したら寮の者へ通信してやらうと思つて。』

『まだ君は一高のを見ないんだつけな、面白いぜ、擬國會はどうだね。』

『可なり盛です、代議士だの、辯護士だの、山陽新報の主筆や中國新報の主筆が來て喋舌つて行きます。それから去年の天長節の運動會も一杯の人だつたさうです、K、知つていらしやるでせう、あの今は判事をしてるK……さんの弟あれが寮に居ますが

通信の端に（當日の騷擾は實に言語に絶し）なんて書いて有りました、操山から眺めると相生橋の筋と、京橋から折れて來る人が皆、學校さして來たてえますからね。』

『隨分盛と見える、今でもランニングの成績はいゝ方ださうだね、陸上運動會は盛だけど、割合に水上運動が振はんのは可愛想だ、僕等の時代によく四國邊へ遠漕に出かけたもんだ、今はどこのコースでやるのかしら。』

『兒島灣の入り口に接近してます、岡山と云ふ處は不思議に水上運動等に油がのりませんね。』

五、宛らの車掌さん

『△△さん貴方東京へ來て、何に一等驚きましたか。』

『何故。』

『えゝ、只質くんです。』

『さうだねえ……と、羅宇屋の汽笛だ、あれには驚かされたよ、ピーピーッと音がるので、下宿の窓から首を延して見ると、例の車を汚ない爺さんがゴロ〳〵引つ張つて行くんだ、下女にきくとあれは煙管の竿替へをやるんだと言はれて合點したが、僕等のとこには無いからね。上京して二日目だつたか。』

『さうですか、僕の大發見でも有りませんが、貴方は改正の電車の車掌の帽子の徽章に氣がつきませんか。』

『さうだッ、よく似てるねえ。』

『ハッハッハッハッ。』

六高の帽章は一寸字で現し憎いが、大日本六高と云ふ字を集めたので、東京市の徽章、將に電車車掌の改正帽子に酷似して居る。

六、篤學の滿田教授

『お茶をのみ玉へ、今日はゆつくりして居ていゝでせう。まだ早いよ、土曜だもの、明日は帝劇へでもお伴しやうじや無いか。』

『有り難う、足が痺れましたから御免蒙ります。』

『いゝとも、おい、も一ッお茶持つて來て呉れ……(一)足立さん(鎌吉)は相變らず評判が惡いかね。』

『あの六ケしい姑さんですか、あの人は獨協出身ですつてね、酒井さんの大層お氣に入りだつたが、先生あまりに權謀術策を逞しうし過ぎるからなア。外交官試驗を何度も受けて失敗したとか云ふじや有りませんか。』

『さア、其の邊はどうかねえ、生徒から嫌はれて損な先生サ、でも今に洋行するさうだから、内藤さん(馬藏)は健在かしら、あの人の早口も有名なものさね。』

『内藤先生、よく御存じですか。』

『一寸講義を聞いた事がある、馬賊先生はどうです、未だ博士號も手に入りませんかつたから知らないけれど、字義は委しいんだとか言ひますね、先生は博士の學位を取るまで妻帶しないと言つてるさうですが、面白いじや有りませんか。大分老けて身えるけど四十一二でせうな。』

『何でもそれ位なんだ、洋服は例によりて汚ないか、洋袴のお尻のところに繼ぎがあるだらうと思ふ、當つたでせう君。』『よく知つてますね、あの位風采を構はぬ人は尠いですよ、大分時代のついた洋服だらうが、それに比較すると、石川さん、轉任した講師の石川さんあたりはハイカラだつた、ネクタイピン等を氣にしてチョイ〳〵取り換へて來ましたからね。』

『先生も孤獨だからね、どうか博士號をとらしたいものだ、いや奥樣を貰つて上げ度いものだ。秋月さん(胤繼)は?』

『岡山の君子ですかア、あの先生位四角四面な人は有りませんねえ、學校で斗りあんなかと思つたら、家庭に訪問しても座布團は出さずに自分は袴を穿いて出て來て、まるで芝居の左樣然らばですからね窮窟な人ですよ、謹嚴無類な人でさア。』

註　(一)足立氏は在職せず

七、岡山の心理學者

『やお茶が來た、菓子を喰ひ玉へ。こゝは日當りがいゝから構はず膝をくずし玉へ。いゝ共いゝ共、時にドクトルオブ、フヒロソフイの三宅(亥四郎)先生は岡山邊に惜ひ學者だね、先生に就て一佳話ありだ、あれは松本亦太郎博士に次ぐ實驗心理の學者だつてね、何でも博士の價値は充分だけれど、先生頗る名利に淡い人だから別に何等當局に要求しないンださうだ。』

例の丸龜千里眼の時、(一)岡野教授(義三郎)と一緒に行つたさうだ、透視には大概な人が文字を書いたが先生は何を思ふ處有つてが簡短な畫を書いたんださうだ。どころが當らなかつたので其の場では默つて岡山へ歸つた、先生何も語らなんだが其面上には隱し切れぬ微笑が浮んで居た、と云ふ默劇の一齣だアね、よく人と爲りが現れてると思ふ。』

『さうですか、二部の松尾(松太郎)さんは洒落がうまいんですよ、原さん(榮)は京都の地理に委しいので有名です、でも教授として小々貫目が輕う御坐んすね。中學教師等にはよさゝうだけれど、落合さん(貞三郎)に就ても面白い話があります。』

『あの人は東京の自轉車商に養子に行つてたんだが、先生の性格が、商賣に不向きなので離緣になる時しこたま金子を貰つて夫れで洋行したとの噂が有ります。クリスチヤンですから嘘かも知れません。』

『大倉さん(本澄)はお手の物丈け英語うまいですよ、何と云つても經驗がありますからね、ゼスチユアが巧妙でね。』

『池山さん(榮吉)の手套は例によつて例の如しから、あの人の手套を脱いだのは曾て見た事は無いが、或は巷說の如く皮膚病か何かゝも知れないよ。惡戯小僧日記の(二)佐々木(邦)君は評判はどうだね。』

『最初はあまり思はしく無かつたけれど此の頃見直した樣です。毎も詰襟なんかでス

タ〳〵とやつて來る、筆の瓢逸なのに似ず人は生眞面目ですね。』

『あゝお蔭で故郷の話を久し振に聞かれて面白かつた。今夜は肉をやりに行かう。』

後記　(一)岡野氏は、大島八高校長の女子學習院長轉任をうけて八高校長となり(二)佐々木君は辭して慶應の教授となつた、なほ、金子校長は三高校長に轉じそのあとへ文部省督學官丸山環氏が來任した。

第七高等學校造士館

一、南國南方の情調

南方の國、南方と云ふ字音は既に其の訓み方に於てさへ何となく快き響きを與ふるもの也。造士館の所在地たる鹿兒島は實に南方の國也。南の國の情調はそも何を以て語らむか、一顆の朱欒、或はよく之を説明せむ。

朱欒とは橙と似たる柑橘類の果物にて、橙に比して今少し太し。一顆をとりて其の表皮に縦横に洋刀の刃を當つれば、柔かなる香氣を含める細やかなる霧の樣なるものがフンワリと鼻を衝く也。北原白秋君の雜誌『朱欒』も又た此の境地を狙へるものならんか。朱欒を切り割く時の匂を知らぬ人には話が合ふ譯に行かねど、一冊の朱欒はよく此のおもむきを傳ふ、南國の情調はフンワリとした柔かき匂ひの中に住む。

鹿兒島と云ふ國は、何となく種々の聯想を起させる國也。薩摩絣の産地にして、薩

摩いもの產地にして、國分煙草の產地にして、且つは又た櫻島大根の產地也。忘る可らざるは十年の役の主動者にして、一世の偉材たる大西鄕、此土地の人の所謂『せいごうどん』の生れたる國たる事也。

二、舊城利用の學校

七高の歷史も複雜せるものなるかな。七高のそも〳〵の創りは安永二年島津氏の設立に端を發し、明治四年頃廢絕し、十七年に島津忠義公之れを再興し、時の縣廳は鹿兒島中學と鹿兒島學校を併せて縣立中學造士館となしたり。二十年十二月高等中學造士館に改め、島津珍彥男館長たり。二十四年八月視學官川上彥次之れに代り、二十六年三月又た島津男の復職を見る。二十九年九月都合にて文部省と解き、生徒は轉學を命ぜられ、同年の十二月には又もや尋常中學造士館となり下りしが、三十四年にいたり、撚りを戻して高等學校の列に復する事が出來たり。島津忠義公は大いに奮發して十六萬五千圓の金子と建物全部を文部省に寄附す。時の一中校長岩崎行親氏校長となり大正元年九月辭して文部省視學官小西重直氏校長となる、大正二年八月小西氏京大文科教授に轉任し、三高教授吉田賢龍氏後任として來任す。

開校の具合を委しく云へば、三十四年六月に今の山下町一一七に設置を定められ、十月二十五日に開校せられしにて、四十四年十月を以て十週年に相當し、盛においどんとわいどんとが酒杯を擧げたり。

土地の全坪數一萬六千四百五十六坪、建坪二千五百四十九坪四合、所は城山の下にて舊城を利用す。城と云ふのが元來斜面の土地を拓きてつくれるものなるが、土地が高い故、どこもかも充分に見渡せて頗る愉快也。

三、四月櫻島の快遊

此の四月は恰も春季水上運動會の施行せらるべき月に相當す。七高は運動には大層力瘤を入れ柔道、擊劍、野球皆な相當にやり、取り分盛なるは端艇競漕也。濱磯にて之を行ふ、島津公別邸の附近にて、此の日は學校關係者以外、市民總出の盛況を呈

す。七高のボートレエスは鹿兒島市の年中行事の重大なる一ッとして擧るを得。

ボートは新らしきを三艘に古いのが二艘あり、貸しボートも澤山ありて、學生の用ふるに任ず。櫻島へは約一時間にて達り得べきが、ボート漕ぐ人には格好の航程にして、土曜日曜にかけては此の島へ遊ぶ人多し、温泉あり古里、又た有村、古里の温泉の如き七高の繩張りと云ふも不可なし。島には大根を產するが、枇杷あり、蜜柑あり、其のシーズンとなれば此の島に學生の影を見ざるは無し。バナナも安價に食ふ事を得此の近海には鰹類、春の青き魚類多し。

四、大根攻め豚骨汁

櫻島大根は一升入の白鳥以上の大きさのものあり、甘味なり。輪切りにしふろ吹きとして食する時は格別也。時として九月十月の二ヶ月間は、大根攻めに逢ふ事もあり。物價は普通にて下宿料は十一圓位が中庸を得しところ也。

牛肉もやすし。東京の一人前と違ひて二人前を平ぐるは骨の折れる業也。薩摩汁の本場とて此の馳走多し、鹿兒島の名物に豚骨汁あり。

豚骨汁は讀んで字の如く、豚の肉つきの骨を鍋にぶち込んで煮こむのにして、一種特別の味あり、鹿兒島の鷄料理法も一風變れり、羽をとりて一寸火にあて、骨の儘ブッ切りにして煮る、頗る蠻的なれど美味し、料理の手を略きてのみの業には有らず。此れ等の凡て薩州人の氣風を代表す。

鰹節をとりて薩摩節と伊豆節とをつぶさに比較せよ。鰹は春より二つに割りて更に二つに割り、春の分を男節と云ひ、腹の部分を女節と稱す。伊豆節は男節と女節と分つ際に其の肉の具合を巧く斷ち切りて、全國の鰹節中技巧に於て第一位に居るなれど薩摩節と土佐節は其の製法のブッキラボーなる點に於て一致す。薩摩節は體裁など構つて居れず。肉と肉との筋目がドンナ風になつて居らうと構はず一文字に斷ち切り、其の無愛想なる事言はん方なし、味に於て甲乙なきも薩摩節は上等の料理に使ふべく汁を濁す等の事あり伊豆節の後に居ると云へり、話が飛んだ横道に入つたれど其の氣

象をうかゞふに足るを以て揭げたり。

鹿兒島にリヤンボーなるもの有り。土地の人はジャンボーと云ふ、兩棒の義ならんが、餅を燒きて串にさし黑砂糖と味噌と摺り交ぜて塗りたるもの也。學生、最も好んで之れを食す。

五、篠原先生の精力

食ひ意地の張れる我れなる哉。今度は先生の評判に移らん。先づ槍玉に擧ぐ可きは今日多少の印象を殘せる前々校長の岩崎行親先生なれど、特記する逸話もなし。古き札幌農學校の卒業生也。年の頃五十に近からむか。

名物の先生と云へば、(一)篠原教授(益三)なるべし理學士にて數學を擔任すれど先生の如く何でも知つた人は尠からむ。シルレルとゲエテ通にして、時々氣焰を上ぐ、シルレルの或る劇の如き、全部諳記して生徒の前で博覽强記を打ち撒けし事あり、先生の曰く、『書物は三百度も讀めば覺えるもんだ』と。精力、尋常に超ゆ、されど、惜しい哉風采擧らず、地上の塵を拾ふ樣な眼付して歩く。

魚釣りが大好きにて、謹嚴犯す可らざる口調にて『御前の方では鰻はどうして釣るか』と奇問を發せられし事あり、酒煙草茶の三道樂に浮身をやつし、數學の時間に茶をうたいたつた詩があるから迚朗讀して聞かせし等、正に凡人の境地を脫す。

小崎教授(成章)は靈南坂教會の小崎弘道氏の令弟にて、MBの學位を有す。ハーバート大學を首席にて卒業せしとかにして七高英語のオーソリチー、THの發音が素敵だとの評判也。(二)菅野教授(養助)は獨逸歸りのハイカラにて、校友會副會長、興にのればジャーマンの麥酒、決鬪の話などをして若い青年を浮き立たす。動物學の池田教授(作次郎)はどんこの綽名あり。墓の事を鹿兒島にてどんこと云ふ。どんこは先生のメスを取りて解剖し玉ふ故と、先生の風采頗るどんこに酷似せるの二途に出づとの說あり、いづれにしても不敬千萬。どんこの發明者はとつちめて油を絞つてやる必要あるべし。

註　(一)篠原氏は、勅任となり近頃辭職す(二)菅野氏、東北大學醫專部教授に轉じたり、今知らず。

六、その他の教授連

久保田教授(温郎)は化學の分擔にて峻嚴極まるとの評あり、嘘を書くとマイナスをつけるが久保田式なれど、平素の出來を參酌して採點する故評判さまで惡しからず。人物として可愛らしい側ならん。二三年前まで奥樣の代りに猿を可愛がり居たりしが奥樣を迎へて今はどうしたりけん(三)永山教授は豚監の名あり。豚の如く太りたれば也。監は生徒監の監山田教授を山監と稱するが如し。

(四)仲野教授(秀治)の行動は頗るユーモアに富む。其の代りに講義に誤魔化しも可なり有る樣なり。(五)松本教授(闇薫)はバリストルの肩書を有す。日本でバリストルは七人しかないとて、生徒を煙にまくこと夥し。容貌米國のブライアンに酷似せるを以て、ブライアンと稱す。今評判の岡田式靜坐法と腹式呼吸に則りてあれまでになり上げたる人にして、英人の奥樣あり風采も堂々たり、會話は上手なれど文法やら何かはチョッと其の。

(六)鴻巣(盛廣)教授は文學士にて新派歌人也。新しき方の側にて皆川正禧教授あり。

(七)小野教授(藤太)は篠原教授と同樣、數學の教授にして其の趣味は頗る多方面に亙る。鹿兒島新聞の俳句の選者にして書をもよくし、獨學にて佛英も相當にやれると云ふ。其の他先生の數も澤山あれど此の位にて止めむ。恨もないのに棚卸しをやつて此方が恨まれゝば損なれば、是が現代人の一般思潮なれば。

註　(三)永山氏在職せず、(四)仲野氏免官、(五)松本氏二高へ轉任して免官慶應に入る、(六)鴻巣氏、四高へ轉任(七)小野氏免官

七、『げむぶる』の語源

彩雲匂ふ櫻島、月影清き薩摩潟、秋　酣に馬肥えて、野邊の白露繁き時、翡翠の帷つんざきて、立つや海四百二城。

又た曰く

古きを溫れ新らしき、基さだめし其の上を、辿りて今や七年の、今日を迎ふる桶の陛、深き緣の葉を照す
希望の星のかげ高し。

此の歌は二三年前の校友會の歌なるが、高等學校の歌は大抵こんなもの也、歌の文句にもある通り校の內外には楠多し、校內には大蘇鐵樹あり、南國のおもむきに叶ふ

學生の生活狀態は、回を逐ふて略述せる如く、素人下宿最も多數を占む。人間が淳朴なれば、居心地のよい事非常なりと云ふ。寄宿舍は百二十三人を容れ、最初一年丈け義務的に入會の必要あり、寄宿舍の生活も同じものなり。食費は六圓舍費を併せて七圓五十錢、學校の門限時間は九時にしてそれより遲れし時は門が閉つて居ればそれ相當の手段を施してベッドの上の人となる、之れを『げむぶる』と云ふ。

『げむぶる』は『玄武る』也、日淸戰役の時、原田重吉が單身玄武門を破る、門開かざれば乘り越えざるを得ず、卽ち『げむぶ』らざるを得ず、學生に對する醜聞は相互の制裁あるを以て割合に尠し。

學校の徽章は鶴の丸に七高と記す、島津氏の遺紋也、金澤の前田侯、自邸を提供して四高を作り、鹿兒島の島津公舊城地を提供して七高をつくる。四高と七高とは新聞紙の刺戟を受けて發奮せる點に於ても共通せり。

風暖かき南の國、人情の淳朴なる南の國、ペンととりて南の國なる七高を想へば、帶の如き海岸の小都會と白線鶴丸の徽章を帶びたる學生の姿、吾が眼前に浮み出づ。

後記　物價及び教授の異動多きも、こゝに特記せず

第八高等學校

一、最新建築の學校

名古屋の第八高等學校は、高等學校として一番ビリにある、其の歴史はまだ新らしくて評判記に組み入るべく些と早手廻しかも知れない。然し物は順序だ、一と通り書いて見やう。他の高等學校が既に枯れ切つたものとしても八高は未だ生々しいと云つていゝ、漸と四十四年第一回の卒業生を出した位だもの。

四十三年の名古屋共進會のあつた鶴舞公園前で電車を下りて二十町斗り、一間幅位の田舍道を毎日〳〵横文字の8の字の徽章をつけた學生が通つて行く、それが八高生である。名古屋の方角から學校へ行くには此の狹い道より外に通る道が無い、然るに熱田の方からは學校の正門まで實に立派な往來が通じて居る。之れが既に私共の不服ですと八高生は語る。未だ〳〵不平は澤山あるが、一々相手になつて居ては際限がないから先へ走らして行く。

愛知縣愛知郡呼續町、こゝが卽ち學校の所在地である。此の學校は高等學校として外觀から內容から一頭地をぬいて居る。要するに新設校なるが故金子がタップリあるからの話だが、此の學校はつまり愛知縣人が自分達のところへも高等學校位のものは無いと肩身が狹いとて金子を出して拵へたので、第一、明り取りの具合がいゝ、第二、器具が充分に具はつて居る、第三何々と擧げて來たら推讃すべきもの澤山、漸次に汚なく侵蝕せられつゝある仙臺二高の如き、八高を見て指をくはえて居る事であらう。

第二の不平が八高生の或る者によりて發せられた。大した矛盾があると云ふから何だと云ふと此の舊來の文部省式をつき拔けた八高にあまりに型に嵌つた校長が居ると云ふのである。（校長が更代したから削除してもいゝが）

二、特待生徒の落第

大島（義修）校長は明治二十七年哲學科出の文學士であると同時に、陸軍中尉の肩書がある、桑木博士、原博士、いづれも中尉だが陸軍式の操縱法が、其の教授の方針に於て手加減に於て尠からず加味せられると云ふ事は止むを得ないと云ふのだ。そして校長さんが文部省あたりで幅がきく樣に、學校で心服してる生徒は尠いらしく見える

各高等學校では、辯論部が振つて居る一高二高の如き、野球で威張る三高の如き、遠足部で鳴らして居る四高の如き、それ〳〵の特色かあるのに、此の八高では體操がうまい、兵式體操が得意である。

中學では體操を正科として居る樣であるが、高等學校で體操に力瘤を入れるのは先づ尠いであらう、校長さんの方針は運動部に選手を置かぬと云ふにある。理由とする處は推察するに難からぬ。運動に魂を奪はれて學術が疎になると云ふのであらう。

各高等學校では、第三學期等にきまり切つて授業をしない。三學期の授業は大抵六月の十日頃に切り上げる、殊に、三年の三學期と云ふは最も大切の時間である爲め、早く切り上げて、學生が自修し勉強し、大學に進級する時間を與へる樣にする。

何事にも忠實なる大島校長は、六月十日を疾く過ぎて、七月十日まで授業を打つ通してしまつた。さア生徒の方では大問題である。事は四十四年の出來事である。

八高として、第一回の卒業生を出したのである。大學では、人員を超過した時には競爭試驗を行ふ、八高生の內、殘念乍ら澤山の落第生を出してしまつた。特に二部を著しく、特待生の某までも一年が程まるで遊ばねばならぬ運命をつくつて仕舞つた。

學生にとりては實に大問題である。

校長があまり、規帳面に授業をしたお蔭で吾々は落第した、準備が足りなかつた爲めに落第してしまつた。憤慨した一團は行李匆々新橋から最大急行で名古屋へ直行、校長の許へ車を飛ばし、血眼になつて膝詰の談判に及んだ。

流石の校長も一言も無かつたと云ふ。猶、特筆すべきは『特待生の落第』である。之等は過去の記錄で、今日はさうではあるまいが、然し記事としては逸すべからざる

事であらう。

三、選拔試驗の効果

人間は感情の動物とはそも！、人間は理性に訴へて物事を處決すべしとはホンに倫理の先生に敎はつた樣だ。

特待生の落第はそも何に基いたか、調べる程にタネがあがつた。最大理由を採點の不公平となす。

其の敎師の凡てが左樣であるとは言はれぬが、敎授の或る者の手加減で量にのせて左程の重量の無いものも、敎授がちよいと自分の力を加へた爲めにズルズルと重味が加はつた、實力の十分あるものも、敎授の感情を一回損ねた爲めにはねられてしまふものも有る。

一方から言ふと大學の選拔試驗は、小氣味よい試驗であつた、金に銀鍍金をしたのが發見され、銀に金鍍金をした、錫り屋の所謂ローズもの、先生の所謂手加減ものが此處で箔がはげて來たのである。試驗を以て實力をはかるは早計であるが、或る程度まで試驗によりて鼎の輕重を分ける事が出來る。

然し、それも昔語り。

四、虞美人草の主人

(一)中村敎授は一部で法學通論、獨逸語等を擔任して居る。獨逸協會學校出身で洋行歸りのハイカラ。相當の人氣を繫いで居る。

人望がないと云つてよいのは(二)丸山敎授(環)である。同樣獨語を受け持つて居るのであるが。獰猛に學生の頭に單語をつめ込む。先生の眼には吾々の頭が只の箱の樣に見へはしないかしらんと眉をひそめる者もある。文學士で、獨逸語は大自慢の、ワシの敎へたものを十分にのみ込めば、落第する心配はないと云ふ。然し、御自慢程のものも無ささうだ、其證據には十年も同じ敎科書をこねかへして居ると生徒は云ふ。

氏が學生から毛嫌ひをされるのは、氏に乙なら乙、丙なら丙と點を貰つたら最後、

其の次からの答案がどれ程上出來であらう共、必らず乙なら乙一點張り、丙なら丙一點張りで、どんなに旨くやつても駄目なからである。

中川(芳太郎)教授は、夏目さんの『虞美人草』の主人公であるやの噂がある。文學士で大學の銀時計を頂戴した秀才であるさうな。

赤井(直吉)教授と云ふは基督教信者、京都の同志社を德富蘆花等と一緒に卒業した人である。長崎の高等商業學校に居た事があり、八高が出來ると名古屋へ來た。英語を受け持つて居る。

註　(一)中村氏、大正五年免官(二)丸山氏文部省督學官に轉任、更に六高校長となる。

五、元氣ある櫻井氏

今井(貞臣)教授は歴史を擔任し、極めて溫厚な人物である。櫻井(政隆)教授此の人は先に學習院の教授たり、中川さんと同樣に銀時計仲間であるが、中川さんと正反對の蠻殼、一高出身者の面目は、こゝにも顯れて氣にいらぬ者はドシ〳〵やつゝける。

いつであつたか、學校で寫眞をうつす時、寫眞師を大層に怒鳴りつけてやつた事がある。獨逸語を教へて居るが、一年生の時に丸山さんに教はつた生徒は、櫻井さんの正確な發音が十分にわからない。先生、ヂレて曰く『駄目だなア、君等は丸山に習つたお蔭で發音病に罹つてるんだよ。やり直し、僕の通りだ、いゝかい』

丸山氏も、此の位お茶漬サラリとやつて退けられては、何處へ口を出し樣もない。

橋本(捨次郎)生徒監はもと新潟縣中學校長をつとめた人で、生徒監位には惜しいとの評がある。

兎角感情に支配され易いのの中野(靜)教授だとの話、數學の擔任。綽名を烏蛇と云ふ。一度見込だら容易に許さないからである。先生のお蔭で落第したのは何人もある。獨逸人のハーン、此の人も點が辛い。新來のヘルマンは滑稽交りの講義が尠からず生徒に受けて。ハーンが嫌はれる反動として大した人氣である。

觀じ來れば、何ぞ先生達に尻の穴の狹きが多き。

六、八高とその周圍

吾人の觀察必ずしも的中するものは、無いに相違ないが、又た他山の石として、學校當事者の參考とすべき箇條もあらう樣に思ふ。學校の評判の如き、第三者のひとり宜くする處である。

愛知縣呼續の地、八高の設置以來、日に〳〵發展して行く事、雨後の筍の成長し行くにも似て居る。學校相手の商店も出來れば、如何しい店も出來た。名古屋は風俗に於て實は學校地として面白くない。校内の寄宿舍も以前はあまり入舍を希望する向きが澤山無い樣であるた。然し、此の風はひとり八高のみの現象ではない。

それに寄宿舍以外に宿を求める學生が多い。恰も學校と教授を怖いものゝ樣にして居る新入生もある。然し、それも追々に、馴れて來るであらう。

後記　大島校長は大正七年中、女子學老院長に轉じ、その後任に岡山六高の岡部義三郎教頭が來任した。

北海道帝大豫科

上　北海大學の成立

不自然なる名目の下に忍ばねばならなかつた札幌の農科大學は、久し振りに東北帝國大學と放れて北海道帝國大學の傘下に立つ事になつた。追て醫科大學が創立せらるゝのを待つて、はじめておほべらに綜合大學として通行するのである。

農科大學の起原は東京芝口にはじまる、明治五年四月開拓使假學校と云ふものが芝の增上寺内に開かれ同七年農學專門科を置いた。八年八月學校を北海道札幌に移し札幌農學校と改め、九年七月米國マサチユーセッツ州農學校の規模に則り學則を四年とし卒業者には農學士の學位を授くることゝした。有名なるクラーク氏の指導である。

十五年二月開拓使の廢止と共に學校は農商務省の所管に移り北海道事業管理局の管理となり十九年一月北海道廳の所轄と爲つた。廿八年四月更に文部省の管轄に移り四

十年六月東北帝國大學を仙臺に置くに當つて東北帝國大學農科大學と改稱し、大正七年北海道帝國大學の創立に及んで同大學に附屬した。札幌の農科大學と云つた方が通りがよい。東京農科大學出身者を駒場出と云ひ駒場派と稱し、札幌出身を札幌出又は札幌派と稱し、吾が農學界に二大潮流をなして居る事は人の知る所である。

だが、農科大學は、決して單なる農科大學ではなかつた。明治二十年工學科を設け豫科を置いて本科に入る階梯とし、更に農藝傳習科を置いた。二十二年九月更に兵學校を置いて軍事に關する學術を敎ふる事とした。同月兵學別科を置いて屯田兵曹長免官の者を入れて一ヶ年を以て普通農學と軍事上の學術技藝を敎授する事にした。二十九年校則改正、工學科及豫科を廢し、三十年更に專門學校程度の土木工學科を設け後林學科（はじめ森林科）を設けた。三十九年同じく專門學校程度の水産學科を設けた四十年九月東北帝國大學と改めると共に、大學に農學科の他に農藝化學科、林學科、畜産學科を設けた。專門學校程度として農學實科、林學實科、土木工學科、水産學科を之れに附屬せしめることゝなつた。農科大學とは云ひ條、非常に廣い意味に考へて居た樣である。

初期以來、いろ〳〵と他方面の人が出て居る。明治十三年第一期の卒業生には、現北海道大學總長佐藤昌介博士をはじめ、一時は俳優にまでなつた荒川重秀氏、興農園の渡瀨寅次郎氏があり、第二期生から內村鑑三氏はじめ理學博士宮部金吾、農學博士南鷹次郎、農法學博士新渡戸稻造、工學博士廣井勇諸氏が出て居る。前第七高等學校造士館長岩崎行親氏も同期の卒業生であつた。第四期から頭本元貞、志賀重昂、河村九淵、早川鐵冶、武信由太郎、理博渡瀨庄三郎諸氏が出て居る。いづれも一と癖ある面魂の人々である。

かくて今日まで——札幌農學校となつた明治九年から數へても四十三年である。古に譯だ。法博二名、工博三名、理博四、農博十三名の二十二名（新渡戸博士重複に付實は二一名）を出した勘定である。

醫科大學が出來たら、北海道の空氣はどう變るであらう。農科大學としては兎も角今日まで充分の經驗も積み卒業生の人繰りの上に焦慮する事も要らなかつたが醫科大學については少々小首を傾けざるを得ない。勿論、經費の出所があるからこそ拵へたのであらう。醫科は解剖屍體などの實驗材料にも富むべきを要する、東北大學の嘗めた苦澁から考へて、又たその覆轍をふまねばよいがと云ふ氣もする。

豫科は二十年七月に第一回卒業生を出した。今日まで、三十二回の卒業生を出したがいづれも、農科大學本科へ進入する者計りである。慶應の普通部對大學部に相似たる關係だ。仙臺の東北醫科大學は、學生徒の多からざる關係より、特に臨時的に東北農科大學豫科出身者と雖も入學し得る除外例を作つたが、それでも餘り繁昌しなかつた。現在の豫科主任は文學士渡邊又次郎氏である。東京の人、明治二十六年哲學科出身の人だ。暫らく東京市日比谷圖書館長をして居た事がある。明治四十四年八月來任したものである。渡邊氏の前主任は溝淵進馬氏、第四高等學校長吉村寅太郎氏の退職を承けて溝淵氏は轉じてその後を塡め、そこへ渡邊氏が乘り込んだと云ふ譯なのだ。氏はあまり細かすぎるとか云ふので、餘り生徒受けはよくない樣である。

下　豫科と其の生活

豫科教授には、數學を教ふる人に三田村理學士、物理學に青葉理學士、英語を教ふる人にD、PH高杉榮治郎氏、B、A木村勇氏などがある。先生には亞米利加仕込が少なくない。今は創作家として一時に賣り出した有島武郎氏も、四四年札幌出の農學士で後米國ハーバアード大學を出でM・Aを持つて居るが、暫らく母校豫科の教授をして居た。故夫人の疾む前後より辭したのである。英語、英文學の先生として生徒等に與へたる感銘は頗る深いものがあるらしい。

農科大學は札幌區北八條西六丁目にある。豫科教室は土木工學科と合同で、正門を入るとすぐ右手に見えて居る。道の左手は官舍である、機械庫の前のところで三叉路になつたのを眞ん中に道をとつて進むと右手は大學本部の事務所で橋一つを渡つて稍

暫時、右手に綠樹の間に陰見するは畜産學及獸醫學講堂と林學科工藝實驗室だ。更にその巾廣の道の前進すれば突き當りが農學講堂で、右手は昆蟲學養蠶學講堂、圖書館農產化學講堂等が相聯なり、左側は農業經濟學農政學講堂、水產學科講堂、動植物學講堂等が相聯なる。後へ戻つて昆蟲學養蠶學講堂の横手を入つて行くと、左側に運動場が見え、その後には試驗園蔬菜園が續き蔬菜園に面して及び水產學講堂の後方には果樹園の設けられたるが見渡されるのである。

その運動場を左に見て前進すれば右に桑園が見え、左に第一農場附屬の建物が見え橋一つ渡つた右は第二農場で流れを挾んだ左は第一農場、そこには試驗用水もある。第二農場には黑や白の牛が幾頭も遊んで居る。一體に見渡したところ廣くのび〳〵として氣持のよい事と云つたらない。高いニレやナラの木が天をさして立つて居る、秋晴の北海道などゝ來ては身も心も澄み渡るが如くである。寄宿舍もあるが皆寄宿とは限られない。男性的なウイルアム●スミス●クラークによりて胚胎した札幌精神に浸る事の出來るのは、最も喜びとせねばならない。札幌農學校前初の校長は調所廣丈と云ふ人で、後北海道廳の管轄となつてから理事官の橋口文藏氏が兼ねた、最もその時已に第一回卒業生たる佐藤昌介氏が教授として校長の實務を執つて居た。佐藤教授が正式に校長となつたのは二十四年頃からで後東北農科大學となるに及んで學長となり大正七年北海道大學成立については農科大學長を以て總長を兼ねた。博士はクラークの精神的感化を多大に承けた一人である。

札幌學校が札幌農學校と改まつた、その改革立案をしたのは卽ちクラーク氏であつた。ウイリアム●スミス●クラークは北米合衆國マサチューセッツ州に生れアム●ハースト大學を出て歐洲に遊び歸朝後母校に教鞭を執り南北戰爭の時北軍の一士官として奴隷廢止の爲め奮鬪し功により陸軍少將となつた。然しそんな位置は彼の顧みる所でなく戰止んで自らマサチューセッツ農學校を設立した。そして開拓使長官黑田伯の招聘に應じて來朝したのである。氏は火の樣な熱誠をもつた基督教徒であつた。

赴任後の人格感化は、その短期な割合に偉大なる働きをした。今日もそれが殘つて居る。札幌は學生の風儀がよい、市人は大學の學生々徒を尊敬する、造廓に出入する事丈けは嚴禁されて居るが他は頗る自由である。

高等學校受驗秘訣 終

大正八年四月二十五日印刷
大正八年四月二十八日發行

定價金壹圓五拾錢

著作者　出口競

東京市京橋區南八丁堀一丁目一番地
日本圖書出版株式會社取締役社長
發行人　小西榮三郎

東京市京橋區南小田原町二丁目十六番地
印刷者　金津三之助

印刷所　日本圖書出版株式會社印刷部

著作權所有

發行所　東京市京橋區京橋電話局前
日本圖書出版株式會社經營
小西書店
電話京橋二二〇三・三七五八番
振替東京一二〇三番

小西書店出版圖書

思想界の先驅者＝桐生悠々先生新著

有らゆる物の書換

▲四六版總クロース函入
▲定價一圓四十錢稅八錢

曉の鐘鳴り響く＝古きは去りて＝新しき世界生まる＝舊時代に慊らざるものは＝來りて汝の渇を癒せ＝あゝ有ゆる物の書換

著者桐生悠々先生は思想界の權威者である。現代の先驅者である、而して先生の思想は日々に新たにして常に現代人に一歩を先んず、故に、先生は眠れるが如く死せるが如き現代に慊らざる事夥しく、常に侃々の論、諤々の議を筆にして熱烈に現代人の覺醒を促して止まない、而して本書は即ち先生日常の不平錄とも見る可く、生ぬるき現代の革新を絶叫し、權威を失墜したる現代の道德を罵倒して新時代の道德の如何なるものかを敎へ、歸趣に惑ひつゝある現代人に向つて將さに適歸せざる可らざる新進路を指示し、恰も神が人の子を敎ふるが如く、權威を以て「此新しき道を行け！」と命ず、書中收むる所、社會問題あり、男女道德論あり、自由の哲學あり、性慾問題あり、二重生活破壞論あり、何故軍備堂々たるものである、觀察眞に防禦の米國は强かりしやの一文の如き所論堂々たるの獨逸が弱しして無奇拔思索殊に深遠、理路誠に明晰、現代稀に見るの良書である、殊に「學校立憲國」の一大雄篇は彼の有名なるギルの「新公民」を布衍したるものであつて民衆の勢力漸く强大ならんとする今の時代に於て、識者の見逃す能はざる最良最好の指針である敢て勸む。

小西書店出版圖書

●釋宗演老師新著

叩けよ開かれん

▼四六版總布製美本
▼總ルビ附二百餘頁
▼價一圓二十錢送料八錢

老師近來の快著＝文章平易＝思想深遠＝人生為破す＝

好評嘖々＝＝初版忽賣切（再版出來）

書本内容

▼平等觀と差別觀＝天地は一大連鎖▼禪とは何ぞや＝人はパンのみにて生きず＝大休息の處に▼精神的大燈明＝闇は箒で掃き出せぬ▼趙州和尙の機鋒＝念じ來つて寂々＝如何なるか是石橋＝如何なるか是大善▼眞風度籌＝青山動かず白雲去來す＝疎漫なる個人主義＝我とは何ぞや▼徒らに新を說く勿れ＝いはゆる絕對に到れ▼力は卽ち用＝禪は力▼叩けよ開かれん＝向上の一路▼婦人と參禪＝自ら欺かざれ▼死の刹那の安息＝穢土卽淨土▼袴が座右の銘＝宇宙と我し＝六千萬人と雖吾行かん＝貧富何かあらん▼心は毒蛇の如膽力＝菩提の靈光▼男女の鬪爭＝物騷の世の中▼相模太郎の淫聲是れ長廣舌外百有餘篇

□小西書店發行□

田原鄕造著	儲かる椎茸（ゑ珍らしき白木耳）	定價金七十錢 送料四錢
法學博士 田尻稻次郎著	米穀經濟	定價金一圓二十錢 送料六錢
理學士 後藤常市著	最新應用化學	定價金三圓五十錢 送料十二錢
小西榮三郎著	一攫千金	定價金一圓四十錢 送料八錢
小西榮三郎著	金は金を生む	定價金一圓五十錢 送料八錢
無名將軍著	帝國の危機 大戰來る	定價金一圓六十錢 送料八錢
野中春洋著	列强名士 大舌戰	定價金一圓五十錢 送料八錢
海軍中將 佐藤鐵太郎著	剛健主義の日蓮	定價金九十五錢 送料六錢
釋宗演著	叩けよ開かれん	定價金一圓二十錢 送料六錢
醫學士 佐藤壽著	老人にならぬ健康法	定價金一圓二十錢 送料六錢
桐生悠々著	有らゆる物の書換	定價金一圓四十錢 送料八錢
陸軍大將 福島安正著	伯林より東京へ 單騎遠征	定價金一圓四十錢 送料八錢

283
27

終